

そして比企谷八幡は仮面の少女と

白羽咲

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分を傷つけることでしか他人を救えない少年と  
仮面を被った運命をなぞるだけの少女の  
ちょっと変わったラブストーリー

# 目

# 次

プロローグ			
プロローグ	#0	そして夜はいくつ	
もの終わりを告げる			
main story			
#1 そして比企谷八幡は限界を迎える	12	5	1
#2 ずっと比企谷八幡は誰かに頼りたかった			
#3 そして平塚静は後悔する			
#4 今一度、比企谷八幡は自分と向き合う	21		34

#5 ついに雪ノ下陽乃是決断を下す			
#6 そして彼は本物を探す	—	52	42
#7 雪ノ下陽乃が、一步踏み出すには			
#8 けれど今この時だけは	—	65	59
#9 だから雪ノ下陽乃是自身の運命を呪う			
#10 1歩ずつでも比企谷八幡は変わっていく		73	
#11 だから比企谷八幡は —	88	80	
main story 『NEXT』			
#1, そして2人は再び巡り会う			

96

#2,

ただ、雪ノ下陽乃是 — 103  
#3, きつと雪ノ下陽乃の幸せの音

色は

#4, 故に、その思いに迷いはない

112

#5,

そして比企谷は仮面の少女と

119

a n o t h e r s t o r y

128

告げる

135

#1," そして由比ヶ浜結衣は離別を  
#2," 由比ヶ浜結衣の居場所は

140

a f t e r s t o r y

#L A S T そして物語はどこまでも

続く

149

# プロローグ #0 そして夜はいくつもの終わりを告げる

秋、俺は修学旅行に向かう時2つの依頼を受けた。  
1つは戸部から受けた依頼「戸部の告白を成功させる」こと。このことは奉仕部の全員が知っている話だ。

だがもう1つ、俺は個人で依頼を受けた。それは戸部が好意を寄せている相手、海老名さんから受けた「戸部の告白を未然に防ぐ」という依頼である。

この大きく矛盾する依頼を解決することはほぼ不可能と言つてよかつた。いや、不可能だつた。

当然だ。海老名さんには男性への好意がない。告白したつてそれは自殺行為だ。

そこで1番予想できるパターンのように告白が失敗するとしよう。

いつも同じグループにいる海老名さんと戸部の間に溝ができれば、酷く脆いあのグループはいとも簡単にすれ違いが起き、すぐ消えてしまうだろう。

そうすれば、依頼の関係ない所の人も被害をこうむってしまう。それだけは避けたかった。

だから俺は自分を犠牲にすることで問題を消そうとした。

「海老名さん、ずっと前から好きでした。付き合ってください」

俺は嘘の告白で海老名さんの本心を引き出し、そこはかとなくそれを戸部に伝えた。もちろん、海老名さんからの答えは「NO」であった。

これでいい。結局傷つくのは俺一人で済む。どうせあいつらは住む世界が違う人間だ。

そう思っていた。

しかし、雪ノ下、由比ヶ浜からは批難の声を浴びた。

「あなたのやり方…嫌いだわ」

「人の気持ち、もつと考えてよ！」

なんだよ…このやり方で何も悪くねえじやねえか。

なあ雪ノ下。

やり方が嫌い？だつたら他の方法があつたのかよ。

誰もが不幸なく生きれる方法なんてない。今生きている世界がそうだ。  
なあ由比ヶ浜。

気持ちを考えろ？ 気持ちだけで依頼が解決出来るか？ それまで変わらなかつた関係  
を変えずにいられるか？

その答えは「否」である。

（誰かが犠牲にならなければ、人という字は片方が支えながら出来てゐるよう、自分  
が犠牲になるしかない。なのに……なのに、そのやり方を否定するなよ……）

俺は自分の生き方を否定されたような気がし、いつの間にか心にイライラを生んでいた。

そう気づいた時、俺達奉仕部の関係にヒビが入つたような音がした気がした。

それから俺と由比ヶ浜と雪ノ下はホテルへの帰路についた。

だが、そこには言葉はなく、冷たいままの空氣、長らく続く静寂だけがあつた。  
時間は夜。もう少し日が過ぎれば冬のような冷たさがやつてくるだろう。  
けれど、

#### 4 プロローグ #0 そして夜はいくつもの終わりを告げる

その冷たさが今、自分をおおつている気がした。

# m a i n s t o r y

## #1 そして比企谷八幡は限界を迎える

修学旅行が終わり、教室は浮かれた空気が薄れていった。が、俺が今見ている俺の机の上には

「死ね」だの「クズ」だの書かれた紙が何枚も置いてあつた。  
⋮ くだらん。

はいはいご苦労さまですねーなどと思いながら紙を丸め、そのままゴミ箱に投げ入れる。

「まあ、最初はこんなもんだろう。」

雑音に紛れ誰かが呟いた気がしたが、はつきりと聞こえることは無かつた。

放課後になると急に憂鬱な気分が押し寄せてきた。

それもそうだろう。今の関係のまま奉仕部に行つてしまつたら、本当に全てが壊れそうでたまらない。

所詮これも、偽物の関係だつたのかもしねえな。

幸い、今日は由比ヶ浜は三浦たちと予定が入つてゐるようで部活は休むようだ。  
とりあえず俺も部活を休む連絡だけしてMAXコーヒーでも買つて帰ろう。  
そう思つて自販機へと向かう。

その道中何人か俺の下駄箱の近くでたむろつてゐる連中を見かけたが、気にしないでおこう。

自販機でMAXコーヒーをかい、雪ノ下に部活を休むことを伝え、玄関へと向かう。  
あつさりと許可を出してもらつたのはなんとも言えないのだが。

玄関に来てみたが、さつきまでの連中はもう居なくなつていた。ただ、たむろつてい  
たぶん、なにかされる可能性が高い。

一応警戒して自分の下駄箱を開けてみるなり、つま先の方までびつしりとゴミが入つ  
ていた。

⋮ めんどくせえ。

とりあえず何も考えずに近くのゴミ箱へと捨てに行く。

大丈夫、訓練されたぼつちはこんな小学生並みの嫌がらせには負けないんだからね!!  
なんて思いながら今日のところは帰ることにした。  
戦略的撤退? 何それ。負けてねーし。

翌日からも同等の嫌がらせは続いた。そしてそれは、日に日にレベルが上がりつて行つた。クラスではヒソヒソと嘲笑う声が聞こえ、机には小さく彫刻刀で削つたりした跡が見えて出した。

こうも続くとさすがに面倒くさい。

そうして少しづつストレスが溜まつてきてたある日のことだつた。

俺はいつも通りチャリで学校へ向かう。後ろに乗つてる小町は「お兄ちゃん、最近どんどん目が腐つていってない?」なんて言つてるが、まあ無理もない。  
はあ…行きたくねえ。

小町を届けたあと、学校へ向かい教室へ入る。いつもと変わらないような景色がそこにはある。明らかに一個人に矛先が向いた、変わつてしまつたいつもと変わらない景色。

ふと思つた。俺が守りたかったものはなんだと。  
ただ、そんなのは一瞬。後ろから声が掛かる。

「八幡! おはよう!」

「…ん、ああ」

いつもの眩しい笑顔で戸塚がやつて来る。ただ、少し瞳は曇ったように見える。  
「…ねえ八幡。大丈夫?」

戸塚はそれまでの笑顔から表情を変えた。

「大丈夫だ。どうせ目立たないくらいの嫌がらせだしな。」

実のところだいぶ精神的にきている。けど、戸塚にまで迷惑はかけれない。

「うん、大丈夫ならいいんだけど…。もししんどかつたら、もつと頼つて欲しいな」  
頼つて欲しい、か。ちょっと前まではそんな居場所があつたかな…。

「ああ、心配、ありがとな。」

そして戸塚は席へ戻った。予鈴が鳴る。さて、今日も憂鬱な一日が始まるのか。

いつもの憂鬱な6時間が終わつた。今日もまっすぐ家へ向かう予定だ。3日ほど前、  
雪ノ下から「無理に来なくていいわよ」との連絡があり、今はそれに甘えさせて貰つて  
いる。

今日は書店にでもよるか。

そんなことを考え、階段を降りようとした時だつた。

ドンッ

一瞬何が起きたかわからなかつた。そして、それと分かつた時にはもう遅かつた。身

体が宙に浮いている。そしてその先には……

ダアン！

激しい衝撃とともに俺の身体は階段の踊り場の壁にぶつかる。

「うう……あ……」

全身を鋭い痛みが走り、まともに声が出せない。頭からは血が流れた感じがし、変な方向へは向いてないものの、地面に着いた際強く打つた足はかなり腫れていた。

「はつ、ざまあねえぜ」

「もう行こうぜ、証拠なんて残されたらタチ悪いじゃん？」

どこかで聞いた声だ。確かこれは……。

あれだ。葉山のグループの大和と大岡だ。

……なんだよ。俺は自分を犠牲にしてまで守ったグループの連中に痛めつけられるのかよ。

「クソツ……！」

そう吐き捨てて立ち上がる。今は帰らなければ。帰らなければいけない。

立ち上がった際右足に再び激痛が走る。一瞬バランスを崩したがなんとか立て直し、手すりに捕まりながら自転車を目指す。

頭の血は持ち合わせていたハンカチで一応止血はしておいた。が、少しづつではある

が血は流れている。

いつものゴミだらけの下駄箱を抜け、やつとの思いで自転車置き場に着く。けれどそこには

タイヤの切り裂かれた自分の自転車が倒れていた。

「ははっ…なんだよこれ」

「なんだってんだよこれは…！」

「俺が何をしたってんだよ…！」

「あは、はははは…」

もう俺は考えるのも、生きるのでさえどうでも良くなつた。帰ろうと思つてたはずなのに、今は帰りたくない。

帰りたくないけど、もうここには居たくない。

いつの間にか強い雨が降り始めていた。

ずっと激痛が走つたままの右足を引きずりながら、俺は傘も刺さないで目的もなく歩いた。ただただ歩いた。

もうフラフラですぐにでも倒れそうだ。そのまま死んでもいいかもしない。

そして俺の身体はついにバランスを崩し倒れる。そんな俺の最後に視線に写ったのは……。

「ひやつはろー！比企谷く……ん……？」

「雪ノ下……さん……ですか……」

1番見られたくない人に見られたなあ……。

ああ、この人驚いてるよ。そりや驚くだらうな。見慣れた人物が頭から血を流して倒れてるんだから。

なんか急に携帯取り出したぞ……？

まあいいか。少し眠くなつてきた。

そしてそのまま俺は……。

意識を失つた。

## #2 ずっと比企谷八幡は誰かに頼りたかった

もし、歩んできた人生に間違いがあつたとしたら。俺はどこで間違えたんだろう

一陽乃 side

最近ぜーんぜん面白いことがない。あーあ退屈だなあ……。

大学帰り、暇つぶしにと立ち寄ったドーナツショップで窓に片手で頬づきながら外を見渡す。私が入つて5分くらいたつた頃から降り出した雨は次第に強くなつてゐた  
いだ。

まあ、傘は持つてるけど……。

つまんないなあ……。

でもすぐに帰りたくないかな。あんまり家にはいたくないし。

こんな時、なにかいおもちゃ……ううん言い間違い。話し相手かなにか居ないかな……。

……いるじやん！

目が腐つててちょっと猫背でちょっと可愛い後輩くんが！

即座に携帯を取り出し、電話をかけようとする。しかし、番号を打つ前に指は止まつた。

うーん。でも部活行つてるかもしないしなあ。電話はちょっと辞めとこうか。

そうしてバッグの中に携帯を収める。

もういいや。今日は帰ろつと。

会計は先に済ませるタイプの店なのでとっくに会計は終わつている。レジ前を通り抜けて私は店を出た。

傘を片手に雨の街へと歩き出す。車を呼んでもいいかもしないが、家は近いので歩いて帰ることにした。

歩き出して数分たつた頃だろうか。差し掛かつた直線に見慣れた目の死んだ猫背の少年がいた。

なーんだ、部活でないじやん。せつかく見つけたんだし、捕まえてどこか連れて行こうか！

「ひやつはろー！比企谷く・・ん・・？」

私が声をかけた瞬間。目の前で彼は倒れた。その時彼のポケットから出てきた全体が赤に滲んだハンカチを見て声が消えた。こんなに血が滲んだハンカチ、きっと尋常

じやないほどの血が出てるのだろう。

とりあえず深呼吸。

少し落ち着いたので彼の元へ急いで近づく。死んだ魚のような目は開いていない。  
どうやら意識を失つてるようだ。

「これってどういうこと…なのかな」

誰にも聞こえないような独り言を呟く。ちょうど周りには私と彼以外誰もいないの  
だが。

一旦携帯を取り出す。しかし、次の行動に悩んだ。

どうしようかな…。普通に119で呼ぶのが当たり前かもしれないけど、きっと彼  
は表沙汰にしたくないんだろうし…。都築を呼んで近くの病院へ運ぶつてのもありか  
もしれない。

けどやつぱり…

そう思つて私は119の数字を携帯に打ち込んだ。幸い病院は近い。雪ノ下家と関  
わりのある病院というのも好都合だ。

「もしもし雪ノ下です。…はい、救急です。場所は…」

一八幡 side

目が覚めたそこは見知らぬ天井だつた。  
つてよく言うけどほんとだよ？

本当に見知らぬ天井を見上げていた。

「… ん、 と。 ここは… 病院か？」

辺りを見渡して状況を確認する。どうやら病院で間違いないらしい。  
時計は7時を指している。明るさ的に朝のようだ。

はあ…。 なんで生きてんだろ俺。

倒れる前のことを思い出し気分が悪くなる。あのまま最後を迎えてもよかつたのに

な、と冗談でも聞きたくないことを思う。

「はあ… 起きちまつたのか…」

「起きたみたいだね、おはよ」

「うおっ!!」

自分以外の声が聞こえた。何何誰誰まさか幽霊そんなわけいやでも

「おはよ。比企谷くん」

声と同時に隣のカーテンが空いた。そこから現れたのは雪ノ下さんだつた。

「なんだ雪ノ下さんか…。おはようございます… つてはあ？」

「いちいち驚かなくともいいでしょ。あなたが運ばれた。私が見舞いに来た。それだけでしょ？」

「は、はあ…」

とりあえず状況が分かつてきただので体を動かそうとする。しかしその時、動かさうとした右足に激痛が走つた。

「っ!!」

声にならない悲鳴をあげた。雪ノ下さんはそれを見てか表情を変え、少し低い声音で話し始めた。

「今足 痛かつたでしょ」

「いや、別にそこまで…」

「《折れてる》らしいけど？」

「…」

昨日だいぶ腫れてたきがしたけどやつぱりか。

「それで、君は昨日倒れて病院に運ばれた訳だけど」

「まあ、そうみたいですけどね。… どうしたんすか」

雪ノ下さんは一呼吸置いてまた話し出した。それも、さつきより低い声音で。「まずは怪我について。さつきも言つたけど右足が折れてるらしいね。単純骨折だからそんなに直すのに時間はかかるないって。そして頭の方。どうやら切つたみたいだね。6針縫つたらしいよ。」

「はあ…。でもそれだけで意識失うんすか?」

「… ストレス的負担。それが倒れた直接の理由だよ」

言葉に詰まつた。当然だ。その通りなのだろうから。

「君は何かを隠してる。そして今回も隠し抜こうと思つてる。違う?」

「そんなこと…」

「あるね。」

雪ノ下さんは断言した。その瞳には怒りのようなものが見える。

「… 比企谷くん。お姉さんのこと騙そうとしたつて無駄だよ。だいたい何を思つてるか感じることだつてできる。まあ、何が理由かだけは、まだ知らないけどね。」

突如、学校での出来事のフラツシユバツクが起ころ。

(クソつ、クソつ、クソつ!!)

頭の中が混乱して言葉にできない。とにかく叫んで晴らしたい気分だつた。

(助けて、助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて)  
頭の中を助けての文字がよぎる。背中に冷や汗が流れ出し、握りしめた拳が震え出す。

そんな俺の手を取つて雪ノ下さんは俺と目を合わせた。すぐに目を逸らしたが、一瞬、上面ではない、本当の優しさをもつた瞳が見えた。

「…いいよ。全部聞いてあげる。全部受け止めてあげる。だからさ、比企谷くん。一回くらい、私を信じてよ。」

さつきとは真反対の柔らかい微笑み顔で雪ノ下さんはこちらを見つめる。

「なんで、今日は優しいんですか…。こんなのは…信じない方がおかしいじやないですか…。でも、信じたら…」

俺は信じることが怖い。今までだつてずっと裏切られてきた。けれど…でも…。

それと同時に過去全てのトラウマが蘇る。

それへの否定か、あるいはさつきの一言への安堵なのか。理由は分からぬが目尻を熱いものが伝う。

涙。

いつぶりだろうか。ここまで心が不安定なのは。ここまで優しくされたのは。ここ

まで頼りたくなつたのは。

「そ、うだよ、ね……。いいよ、泣いて。ずっと待つてあげる。」

俺の感情をせきとめていたダムが崩壊するには、その一言で十分だつた。

「うつ……うああああああ！」

泣いた。泣き叫んだ。赤子のように。初めて買つてもらつたおもちゃが壊れた子供のようにな。映画で見た愛する人を失つた時のように。感情のままに、泣いた。

「俺は……誰も傷つけたくなかつただけなのに……！」

いまだに涙は止まらない。そんな俺を雪ノ下さんはずつと見守つてくれた。赤子が泣き止むのを優しく見守る母親のように。

「雪ノ下さん……、お願ひが……あります……。」

少し落ち着いた。俺は詰まりながら切れ切れながら口にする。

言つてしまおう、全て。この人を信じて。

「うん。いいよ。聞いてあげる。」

「俺を……。」

助けてください」

## #3 そして平塚静は後悔する

——陽乃 side ——

——過去 病院内待合室——

夢を見た。ただそれは、見たくもない現実。

「陽乃、あなたは、雪ノ下」なの。それ相応の振る舞いをしなさい」

そう言われたのはまだ5歳にもならないころだつた。

私は名家雪ノ下の家に長女として生まれてきた。

私は生まれてからずっと母の言うように過ごしてきた。今もまだそれは変わつていい。

そうして身についたものがこの仮面。中の感情を見せないまま、表情を変えることの出来る仮面。

……こんなもの、いらないんだけどなあ。

——現在 某病院とある病室——

時刻は朝の7時になつていた。

「……んと。ここは……病院か?」

馴染んだいつの声が聞こえる。どうやら彼は目が覚めたようだ。

今はカーテン越しなので、彼の姿が見えない。とりあえず、今は彼の話を聞きたい。そう思つて彼のベットのすぐ近くの椅子へ腰掛ける。

次彼がなにか喋つたら言葉を返してみよう。

そんなことを思つた矢先だつた。

「はあ… 起きちまつたのか…」

「起きたみたいだね。おはよ」

「うおっ!!」

彼は驚いて身体を起こした。よし、そろそろかな。

カーテンをつかみ、右にスライドする。

「おはよ。比企谷くん」

「なんだ雪ノ下さんか… おはようございます… って、はあ？」

「いちいち驚かなくともいいでしょ。あなたが運ばれた。私が見舞いに来た。それだけでしょ？」

マジレスしてしまつた。(・・ω・)

ちよつとリアクションが面白かつたけど、そんなにいらないかな…、なんて。

「は、はあ…」

そう言つて彼は身体を動かそうとした。

が、数秒後、その表情は苦痛に満ちていた。

急に現実に引き戻された気がした。

そう、私は彼に伝えなきやいけないことがある。聞かなきやいけないことがある。ま  
ずは…伝えるほうだ。

そう思うと自然にいつもの笑顔が消えた。心が少し冷めた感覚になる。

「今足、痛かつたでしょ」

「いや、別にそこまで…」

「《折れてる》らしいけど？」

「…」

彼は黙つた。やつぱりこういうことは隠そそうとするんだ。

けど、私は見逃さないよ。

話を戻そうか。

「それで、君は昨日倒れて病院に運ばれた訳だけど

「まあ、そうみたいですが…どうしたんすか」

彼は姿勢を変えない。いつもなら、そんな彼が好きなのに今だけはそれが許せないで

いた。

それが声に出てたのだろうか。声音がいつもより低い気がする。

「まずは怪我について。さつきも言つたけど右足が折れてるらしいね。単純骨折だからそんなに直すのに時間はかかるないって。そして頭の方。どうやら切つたみたいだね。6針縫つたらしいよ。」

「はあ…。でもそれだけで意識失うんすか？」

そうだ。基本そんな怪我じや意識を失うまではいかない。彼に、もう一つの理由を伝える。

「…ストレス的負担。それが倒れた直接の理由だよ」

彼は黙り込んだ。やつぱりそうだ。

今彼は理由はともあれ心にも傷を負っている。けど、その内容は決して言わないだろう。表沙汰にしたくないはずだ。それでも、なぜかはわからないけど。

私は彼を、救いたくなつた。

まずは聞かないといけない。

それが、今私がここにいるもう一つの理由だから。

「君は何かを隠している。そして今回も隠し抜こうと思つてる。違う?」「そんなこと…」

「あるね。」

逃げ続ける彼の態度に少しイライラを覚える。でも、一緒に感じた感情は「哀しい」だつた。

： 分かった。私が彼を救いたい理由。それはきっと、彼が自分と同じ、《変わること》ができない人間》だつたからだ。

きっと彼は変わらないでいたいのだろう。だが、そのままでは彼は何も得られない。失つてばかりになつてしまふ。

私はそんな彼にきっと、小さく自分の影を写していたのかもしれない。同じ変わる」とができない人間として。

だから今は彼を救う。そうすれば自分も少し救われる気がするのだろう。  
でも今はまず、少し叱つた方がいいのかな？

そう思つて彼に声をかける。

： 比企谷くん。お姉さんのこと騙そうとしたつて無駄だよ。だいたい何を思つてるか感じることだつてできる。まあ、何が理由かだけは、まだ知らないけどね。」

これは半分あつて半分嘘だ。

本当は何を思つてるかはつきりわからない。だから伝えて欲しい。

そんな中彼はひとり目をつぶつて首を横に振つている。

強く握りしめている拳が震えていた。

そつか。やっぱ怖かったんだね……。

気がつけば私は彼の手を握っていた。

向き合おう、ちゃんと。そう思つて彼に視線を合わす。  
すぐにはかわされたけど。

今はそんなことどうでもいい。ここまで来たんだ。全部言つてしまおう。

「… いいよ。全部聞いてあげる。全部受け止めてあげる。だからさ、比企谷くん。一  
回くらい、私を信じてよ。」

この時私は初めて

心から微笑んだ。

「なんで、今日は優しいんですか…。こんなの… 信じない方がおかしいじやないです  
か…。でも、信じたら…」

彼はまた下を向いた。けれどそれは何故か分かつている。

彼はどうすればいいか分からぬいんだ。きっと今まで裏切られ続けた人生だから。  
人に頼ることがきつと怖いんだ。

それでも私は、頼つてほしいなあ・・・。  
そして。

彼は泣いていた。涙が彼の頬を伝う。

『一人で泣かなくていいよ。』

心の中でそつと囁いた。このことを伝えよう。今しかない、素直な気持ちで。

「そうだよね・・・。いいよ、泣いて。ずっと待つてあげる。」

それを聞いた瞬間、彼は声を上げて泣き出した。普段の彼からは想像出来ないくらいの顔で。声で。

彼がこらえてきたものがどれくらい大きいか。それを思つたら私の目尻にも少し涙が滲んでいた。

5分くらい経つ頃には、だいぶ落ち着いていた。

そして彼は、少しずつ口にする。

「雪ノ下さん・・・お願ひが・・・あります・・・」

「うん、聞いてあげる。」

そして彼の口から出た言葉は、今私が一番欲しかった言葉だ。  
「俺を…助けてください」

「いいよ。助けてあげる。」

——数十分後 病院外にて——

比企谷くんから全てを聞き、病室を出た私は、昨日のように携帯を取り出した。昨日のうちに小町ちやんにメールは打つておいたので、今は急いで電話をかける必要は無い。今回は彼の身内とは別な人だ。

仮面のせいで結構な数埋まっているアドレス帳、その中のある人物に電話をかける。  
その相手は…：

—平塚 s i d e —

最近、奉仕部の面子の様子がおかしいように感じてきた。  
特に比企谷。

何か依頼があつたのだろう。最近でいえば修学旅行かもしれない。そこでトラブルか何かがあつたということも考えれる。

そんな比企谷の最近だが、目が今まで以上に死んでいる。  
もしかしたらそのトラブルが原因で、比企谷がいじめなんてものにあつていたとした  
ら。

私は生徒指導の担当だ。

それは未然の防がなければいけない。

なにか異変があるかもしれない。クラスを細かくチェックしに行かなければ。  
その時、私のデスクの電話がなつた。

「もしもし、総武高校平塚ですが。」

『もしもし、2—F、比企谷八幡の母です。あの、八幡なんんですけど……』

比企谷の母親からの電話だった。会話中比企谷の名前が出された時、ゾクツとした。  
冷や汗が流れる。

「はい。」

『ちよつと怪我してしまつたようなので、少しの間休ませて頂きます』

「は、はい。分かりました。」

そう言い終わる頃電話が切れた。

嫌な気がする。手が震える。まさかやはり比企谷の身に何かあつたのだろうか。  
しかし、来ない以上詳しく述べることは出来ない。

そう諦めかけていたとき、別の方向から電話がかかってきた。

聞きなれた着信音。携帯だ。

誰からかと思い画面に目を向ける。そこには

「雪ノ下陽乃」

という名前が書かれていた。

何のためにかけたかわからない。ちよつとしたイタズラかもしねい。しかし、比企  
谷の一件に何か関係あるかと思い、電話を取つた。

『ひやつはろー！ 静ちゃん！』

「こんな朝早くから何の用だ。陽乃。」

すると陽乃はこれまで聞いたことの無いような声に変わつた。

『今、比企谷くんの親御さんから電話來たでしょ？』

「… !? なんでそれをお前が知ってるんだ!!？」

私は動搖を隠せなかつた。さつきより震えが増してゐる。

『やだなあ… あんまり大声出さないでよ静ちゃん。一応外には出たけど…、病院な  
んだから』

「病院……？まさか比企谷入院してるのであるのか!?」

『うん、してるよ。』

絶望だつた。私はまた、比企谷を救うことが出来なかつたのか……。  
もはや何も言うことが出来ず、口をぱくぱくする。声が出ない。

『おーい、静ちゃん聞こえてるー？』

「ああ……」

やつと声が出たが空返事になつてしまつた。

しかし。

陽乃は全てを知つてゐる。だから今は辛くとも聞かなければいけない。逃げてはいけない。

「なあ、陽乃……。今、どういう状況か教えてくれ……。」

『そのために電話をかけたからね。伝えるよ』

それから全てを聞いた。修学旅行で受けた依頼を期に比企谷にいじめが始まつたこと。それが依頼主のグループのメンバーだつたこと。そして某句自転車のタイヤを切り裂かれ、階段から落とされたこと。

聞き終わる頃にはもうなにも考えたくなかつた。

ああ、私は教師失格だ。自分の婚期くらいどうにでもなる。けれど、私はそれ以外の、

どうにもならないミスを犯してしまったんだ。

『つてのが比企谷くんから聞いた全て。静ちゃんはもちろん信じるよね?』

「その前に陽乃、一つ聞いてもいいか? 私が比企谷を奉仕部に入部させたこと、間違いだつたと思うか?」

決まつてる。間違いだ。そのせいで今一人の教え子を傷つけている。

『んー、私にはわからないよ。きっと彼にも。でもね静ちゃん。』

『今、彼のために動けないのなら、それは間違いだよ。これでもかつてほどの大間違い。それと、さつきの質問、答えてねー』

陽乃はYesともNoともつかない言葉を返す。ただ、その言葉にはこれ以上にない説得力があつた。今動けるか、動けないか、か。

ならば私は…

「私は…信じる。信じてあいつの味方になる。それが今私が出来る償いだと思う。」

『… 静ちゃんが恩師でよかつた。私も信じるよ。静ちゃんが彼の味方になることを。』

一瞬間に空いて陽乃が返事を返す。いつもと違う雰囲気に私は少し驚いた。これは、

外面なのか?

「なあ陽乃。今日のお前は…なんかこう素直で優しいな。」

『… 気の所為でしょ? まあいいや、もう切るねー』

そして電話は終了した。

携帯を元の位置に戻し、手を目にやり空を見上げる。  
すまない比企谷。私は君の異変に気づけなかつた。  
けれどお前さえ許してくれるなら…。  
お前の味方にならってくれ。そして

お前を必ず助けてみせる。

## #4 今一度、比企谷八幡は自分と向き合う

—陽乃 side —

私は今静ちやんこと平塚静先生に電話している。内容は勿論比企谷くんの事だ。

『私は…信じる。信じてあいつの味方になる。それが今私が出来る償いだと思う。』  
「…静ちやんが恩師でよかつた。私も信じるよ。静ちやんが彼の味方になることを。』

『なあ陽乃。今日のお前は…なんかこう素直で優しいな。』

「…気の所為でしょ？まあいいや、もう切るねー』

そう言い残して電話を切つた。

やつぱり静ちやんは私が言いたかつたことを分かってくれた。

生徒指導の方からきつと上に言つてくれるだろう。

今回これから行動については彼自身が許可を出している。だから私達はその範疇で動くつもりだ。

さて、今はこんなものかな？

いや…。

あと、今日中に彼のことを伝えなきや行けない人間が1人、いや2人いる。

：まあ、今日は大学行かない日だから放課後になるかなー。

二人とも、きっと『部活』に行つてゐるはずだから、覗きに行けば会えると思うけどな。さて、比企谷くんに行つてきますでも伝えてくるか!!

「比企谷 s i d e」

俺以外誰もいない病室。

今一度、自分に問いかけてみる。

俺が欲しかったものはなんだ？

自分を犠牲にしてまで、他人に迷惑かけまいとして生きてきて、欲しかったものは一体なんだ？

分からぬ。

分からぬけど、もしもそれが、今自分の近くにいてくれる人がいてやつと手に入るのなら。

俺は…

「ひやつはろーー比企谷寝てなんてないよねー？」

ドアが開く。そのチンピラっぽい挨拶はいい加減聞き飽きましたよ雪ノ下さん。あと俺は基本寝てます（——） z z z

「意識失つてあれだけ寝てたのにそんなすぐ寝れるわけないじゃないですか。で、どう

したんですか急に帰ってきて。」

時計の針は7：45を指している。

少し前に雪ノ下さんに予定を聞いたところ、今日は朝の方が結構埋まっているらしい。

だから、今ここに長居することはないはずなのだが。

「うーん、そうそう。あのね……」

「なんですか？」

なんですか焦らしですか早く要件を言つてくれない人は正直無理ですごめんなさい。  
なんて冗談めかしたことを思つてみる。

：あれ？ どつかで聞いたことある？

「えーっとその、行つてきます！ 八幡！」

「ええっ！？え、ええ… いつてらつしやい…？」

急に名前で呼ばれてびっくりした。… びっくりするのそこだけ？

しどろもどろになりながらいつてらつしやいを告げる。雪ノ下さんは満足そうな顔  
をドアの方向へむけ、歩いていく。

「ふふふ」と笑い声が聞こえたのは聞かなかつたことにしよう。うん、それがいい。  
勢いよくドアが閉まる。ここ病院だからねやめようね。

嵐のような『いつもの』雪ノ下さんが去っていた。

ふう…。疲れたよお…。（朝の8時前）

さつきまでの雪ノ下さんどこ行つたんだろう…。

ふと辺りを見回すと、雪ノ下さんが座つていた椅子の上に本が置いてあつた。

——数分前 とある病室——

「落ち着いた？」

「はい…。」

ひとしきり泣いたあと、やつと落ち着いてきたので面と向かつて話してみることにする。

それから雪ノ下さんにいじめの経緯、内容、それ前後に起きたイベント、今ある全てを詰まりながら、込み上げる何かを堪えながら話した。

「なるほどね。で、助けるつて具体的に何をすればいいのかな？」

「そうですね…。まず生徒指導の先生、まあ平塚先生とか、上層部の人への通達ですかね…。」

「ふーん、最初っから『主犯のヤツらを潰してくれ』じゃないんだね」

主犯のヤツらと聞いてまた勝手に身体が震える。やはりまだ怖いのかも知れない。

「ああ、ごめんごめん。怯えさせるつもりなんてなかつたんだけどね。」

雪ノ下さんは申し訳なさそうに手を合わせる。

「けど、少なくとも私はそうしたいかな…なんて」

数分前に見た怒りに満ちた目だ。しかし、その矛先は俺ではなさそうだ。

「…まだ結構怖いんです。背後が。階段が。人が。感情が。」

「ううんダメじゃないよ。だって比企谷くんも人間だからね」

今のこの人は本当に優しい。こんなに優しくされると、もつと頼つてしまいたくな  
る。

でも…きつとそれではダメだ。

結局は自分で一步を踏み出さなければ。

「とりあえず、比企谷くんが今どうしたいかは分かつた。

まずは静ちゃんに電話をかけるとして…、そうだ、比企谷くん。部活の2人にはどう  
するの？」

部活の2人…？

『あなたのやり方、嫌いだわ…』

『人の気持ち、もつと考えてよ!!』

その言葉を聞いた瞬間、あの夜のことを思い出した。冷や汗が流れ、息が荒くなる。

「はあつ、はあつ、はつ、はつ…」

だんだん息が早くなり、次第に呼吸が苦しくなってきた。

「比企谷くん?! ちょっと落ち着いて!」

そう叫んで雪ノ下さんは

身体全体を使って俺を抱きしめた。

少し間が空いて、脳が状況を理解したのか、呼吸はどうにか落ち着いた。

「ごめん。一気に話しそぎちやつたね。この話は一旦おこうか」

「… すいません。こちらも迷惑かけて。」

お互い一回距離を置いて深呼吸。

ちよつと雪ノ下さん顔赤かつたなあ…。

「ふう…、とにかく、今は君がどういう状況かを君の周りの人間に伝える。それでいい

？」

「はい、お願ひします。」

結局、こういう話でまとまつた。

「そういえば、小町らには連絡してあるんですか?」

「んー? してあるよー。まあ、内容は詳しく書かずに業務連絡程度にしておいたけど

ね。」

どうやらメールしててくれたようだ。

流石雪ノ下さん。使い分けが完璧すぎる。

「はあ、ありがとうございます。」

「それじゃあ、ちょっと外出てくるから。」

何をするかは何となく察しがついたので、聞かないでおくことにした。スタッタと歩いていく雪ノ下さんを見送る。その背中は自分よりも遙かに大きく感じた。

——現在 とある病室——

とりあえず、今は自分と向き合おう。

俺が欲しいものはなんなのか。なんのために生きていくか。まだまだ俺は俺を知らない。

だから、自分と今一度向き合おう。

そう思つて、雪ノ下さんが置いていったであろう椅子の上にある本に手をかけた。  
その本のタイトルは

『1歩前へ、自分を変える為の魔法』

## #5 ついに雪ノ下陽乃は決断を下す

—由比ヶ浜 side —

あたしは自分がちょっと好き。いつも周りには友達がいてくれて、勉強は出来ないけど自分を認めてくれる人がいてくれて……ちょっと胸があるところとかが。

あたしは自分が大嫌い。その友達の空気だけ読もうとする自分がいて、つまり学習能力がなくていつも周りに迷惑かけてばかりいる自分がいて、もつとそれ以外にも理由はある。

ヒツキーと出会つてあたしは変われるのかなーなんて思つてた。

けど結局、あたしはあたしのままだつた。いつもゆきのんとヒツキーの顔色を見てばつかだつた。

この前を気に、もつとそれが分かつた気がする。  
はあ……。

「… 結衣聞いてんの?」  
「え、ああ、ごめん…。」

優美子に呼ばれて我に返る。

今はHR前。とはいえどそろそろ先生が来る頃だ。

「そういえば今日はヒキタニくん来てないベー?・さつきの結衣、ひよつとしてそれが理由だべー?」

戸部つちの口から唐突にヒツキーの名前が出て、一瞬ビクンっと身体が動いた。

「え?・ああ?・うん、 そうかも?・」

「ヒキオでも休むことくらいあるつしょ。それよりさっさと席つきな。時間来てつしょ。」

「あ、 そうだね。」

あはは?・と苦笑いをして席へ向かう。

HRが終わつた。ヒツキーはやつぱり休みなようだ。

けど、さつきのHR中、ヒツキーの休みの連絡があつた時に大岡くんと大和くんの方から

「休みかよあいつあれだけで?・」

「流石にやりすぎたんじやね?」

なんて聞こえてきた。

なにか不吉なことでも起きてなきやいいけど……。

やつぱり心配だ。

さて、1時間目は移動教室だからなるべく早く移動しよう。

そう思つてた時、チャイムがなり、生徒の呼び出しがあつた。

「2年F組の大岡、大和は生徒指導平塚のところまで来てくれ」  
たつたそれだけの言葉。でも、今のあたしの平常心を碎くにはその一言で十分だつた……。

いつの間にか放課後になつていた。何も考えてなかつたのか、今日は何を習つっていたか全く覚えていない。

グループの方は呼び出しの一件からずつと黙つたままの状況だ。隼人くんも少し落ち着きが欠けてるように見える。

結局、1時間目開始前に呼ばれた、大岡くんと大和くんが戻つてくることはなかつた。

「なあ……比企谷にいじめがあつたつてマジ?」

「さあ……? マジなんじやね?」

クラスメートからボソボソっと声が聞こえる。

嫌だ、今はここにいたくない。

とりあえず、誰かに話を聞いてもらいたい。吐き出してスッキリしたい。

ゆきのん……。

あれから部活に顔を出しにくくなつて行く回数が減つてしまつたけど、ゆきのんは聞いてくれるかな……。

迷つても仕方がない。今は行こう、奉仕部へ。

部室前に着いた。鍵はかかつてない。どうやらゆきのんは今日もいるみたいだ。  
ガラガラツ

少し元気ない音でドアを開ける。ゆきのんはいつもの場所に座つていた。

「あら由比ヶ浜さん。いらっしゃい。」

「や、やつはろー……。」

少し気まずそうに自分の席へ座る。ゆきのんは今日も変わらず文庫本に目を通して  
いる。

……ゆきのんは噂のこと知つてるのかな?

少し聞きにくいけど聞くしかないよね……。

「あ、あのさゆきのん……。」

「どうかしたの由比ヶ浜さん。」

ゆきのんは読んでる本を置いて話に反応してくれた。

「あのさ…ヒツキーの事だけど。噂になつてゐるあれつて…本当なの?」

するとゆきのんは不機嫌そうな顔をして言つた。  
「分からないわ。けど、彼にもしそれがあつたとしたら、『自業自得』としか言えないわ  
ね。」

えつ…?

その言葉は今まで聞いた全ての言葉より冷酷で、鋭かつた。

なんなの?それ…冷たすぎるよ…。

そのとき、もう一度部室のドアが開いた。

「本当に、雪乃ちゃんはそう思つてるの?」

さつきの声よりはるかに冷たい声がする。

そこに居たのは…。

—陽乃 side —

大学が終わり、潰すべき予定は全て終わつた。  
1回病院へよるくらいの時間はあつたけど、そんな毎回毎回比企谷に会いに行つたら

嫌な顔しそうだしやめておいた。

よし、じゃあ向かおうかな。懐かしい母校、総武高校へ。

私の大学から総武高校もそう遠くはない。なので歩いて数分、すぐに総武高校へ着いた。

「なんだ、雪ノ下姉か。悪いけどお目当ての平塚はいねえぞ。多分生徒指導の方行つてるはずだ。」

「あ、そうですか。ありがとうございます。」

私の在学中から居た、少し親しい先生が教えてくれた。

まあいいや、今は向かうべきはここじゃないからね。

私は奉仕部の部活へと向かつて歩いた。

さてと、部室前には着いた。さつきガハマちゃんが入つてくるを見たから、ちよつと様子を見て入ろう。

「あ、あのさゆきのん……。」

「どうかしたの由比ヶ浜さん。」

おつ、早速話し始めたぞ。

内容は比企谷くんの事かな？

「あのさ…ヒツキーの事だけど。噂になつてゐるあれって… 本当なの？」  
… やつぱりもう広まつてたか。

それにしてもさつき思つたけど静ちゃん、行動早いでしょ。ああは言つたけどさ…。  
さて、雪乃ちゃんはどう答えるのかな？

彼のことをどう思つてるのかな？  
けど…

『分からないわ。けど、彼にもしそれがあつたとしたら、《自業自得》としか言えないわ  
ね。』

その答えは、私が望んでるようなものじやなかつた。

自業自得…？

何もやらなかつた雪乃ちゃんがそれを言うの…！？

ふざけないで！

彼に言われた話を思い出し、私の中の何かが切れた。  
気がつけばもうドアを開けていた。

「本当に、雪乃ちゃんはそう思つてるの？」

「…姉さんっ！」

「雪ノ下さん!? 何でここに居るんですか!!」

2人は一斉に驚きの声を上げた。私はと言うと変わらぬ剣幕で部室内へと入つていく。

「ねえ雪乃ちゃん、もう一回だけ聞くよ。今のはあなたの本心?」

「…ええ。本心…のつもりよ。」

一瞬間を置いて雪乃ちゃんはそう言つた。それが本心にしろ偽物にしろ、もうどうでもいい。

もう全てが終わつた気がした。

彼はこんな所にいてはいけない。

彼は自分を幾度なく犠牲にして依頼を、この場所を守つた。でもこの部活はもう腐つてゐる。理由は間違いなく雪乃ちゃんだ。

私は雪乃ちゃんが好きだつた。自分の背中を追つてついてくることがめんどくさい事もあつたけど、それでもまだ妹を好きだと思つていた。

けれど。

今ここにいる雪乃ちゃんは、もう顔も見たくないほど大嫌いだ。

始めて親しかつた人間を心から軽蔑した気がする。

「何もしなかつた、自分のやり方でさえ見せなかつた雪乃ちゃんが、『自業自得』ねえ…。

「言えると思う？今更。」

「…姉さんに何が分かるの!!」

「分かるよ。何があつたかはもう全部『彼』に聞いた。確かにこれは彼自身が招いた結果かもしないよ。だけど、どうしてその答えになつたの？どうしてそうせざるを得なかつたの？…ねえ雪乃ちゃん。一体誰のせいだと思う？」

怒りに任せて全てをぶつける。それでもしないと自分の中にもつとどす黒い感情が溜まつてしまいそうだつたからだ。

「…！そんなの…」

「じゃあ教えてあげようか、それは『待つてください!!』

気がつけばガハマちゃんが叫んでいた。

「…1分だけ話を聞いてあげる。」

「雪ノ下さんは…ヒツキーの現在についてどれだけ知ってるんですか…？」

「全部だよ。多分ガハマちゃんが知りたいことも全部。」

「今、ヒツキーに会うことは出来るんですか…！」

「出来るけど、彼はきっと拒むよ。君たちのことを。」

「どうしてですか！」

ガハマちゃんが涙を目にいっぱい溜めながら幾度となく叫ぶ。けど残念。もう時間

だ。

「はいここまで。ガハマちゃん、続きを自分で見つけてみてね。さて、私はもうここにはいたくないから帰るんだけど、雪乃ちゃんにさつきの答えを教えるね。それは……」

『雪乃ちゃん、君自身だよ』

雪乃ちゃんはもう何も言つてこなかつた。放心状態か何かだろう。  
けど妹のそんな姿でさえ彼の辛さに比べればどうでもいいものだつた。  
薄情？構わないよ別に。

「じゃあね、次会う時が最後になるかもね！」

そう言つて私は奉仕部部室をあとにした。  
さてと比企谷くん。下準備は終わつたよ。  
確認もできた。君を助けるにはあと一手でいい。

もう全部、壊してもいいよね？

## #6 そして彼は本物を探す

一八幡 side 一

⋮ なんじやこりや。

それが椅子に置いてあつた「1歩前へ、自分を変える為の魔法」を読み終わつて第一の感想だつた。

評論文か何かと思つていたが、結局この本には具体的な行動、目指すべき指標は書いていなかつた。

言い換えよう。

「自分一人では変われない」

要約するとそう書いてあつただけだ。

国語3位をもつてすればこれくらいの要約は簡単である。

⋮ いや他のページ何してんの。

そんな本の話はどうでもいい。今日の前の問題はというと⋮

「で、全部伝えちゃつたわけですか⋮」

夕方に病院に寄りに来た雪ノ下さんから奉仕部に行つた時の話を聞いた。そして今

の状況である。

「流石にまずかつたかな？」

申し訳なさそうに手を合わせる雪ノ下さん。

「いや、いずれは言わなきゃいけなかつたんでしようし、問題ないです。ただ、俺自身がもう一度話に行く必要があると思います。」

あとは自分で解決すべきだ。

助けてと言つたものの、他人に縋り続けるのは許せない気がした。が、少し顔に出ていたようで……

「ねえ、また1人で全て終わらせようとしてない？」

雪ノ下さんは少し怒つっていた。この人はほんとになんでも見透かしているようだ。

「なんでそうやつて君は自分から暗い道へ進んでいくの？」

せつかく、君の近くにいれるチャンスが来たのに……

雪ノ下さんは最後なんて呟いているか、俺には聞こえなかつた。ただ、何を伝えたいか、その根本的な部分は伝わつた。

「……甘えていいんですか？」

「はなからそのつもりだしね」

そう言つて雪ノ下さんは微笑む。

綺麗だな…。この人の笑顔。

そんなことを思つてると、電話がかかってきた。  
画面には「平塚静」と表示されていた。

「すいません雪ノ下さん、ちょっと外出できます。」

そう言つてベッドの近くに添えてある松葉杖に手をかける。幸い1回事故した際に  
使用してるので慣れはある。

「じゃ、ここで待つてるね。」

意外にも雪ノ下さんはついてこなかつた。多分、空気を読んでくれたんだろう。  
ちよつと感謝しつつ屋上へ向かうエレベーターへ向かつた。

エレベーターが開き、屋上が目の前に見える。ドアが解放されているのは正直ありが  
たい。

屋上に出たところでもう一度画面を見る。バイブ音もなくなつており、一旦切れてい  
るようだ。

という訳なので、こちらからかけ直す。

『もしもし、平塚だが…。』

「ああ、平塚先生。お疲れ様です。」

『…』

「…」

一瞬の沈黙。切り裂いたのは平塚先生の方だった。

『… 私は、君に謝らなければいけないな。』

「別に、平塚先生は何も悪くないですよ。」

『そうは言つてられない。まずは生徒指導の担当として、君の身にあつたいじめを見つけなかつたこと、すまなかつた…！』

『そもそも隠し隠しでしたからね。それこそ外からじや見つけられないような。だからそれは、許せと言われたら許しますよ。』

先生にそこの罪悪感は感じて欲しくない。

実際、通告しなかつた自分にも非はある。

「だから先生、そんな気を落とさないでください。」

『優しいな、君は。ただ、なにか償わせて欲しい。そうしないと気がすまなそうでな…。』

「… 今度旨いラーメン屋連れてつてくれるだけでいいですよ。』

『分かつた。日程が決まれば予約しておこう。』

即答だつた。

… 芯はぶれないなーこの人。

ただ、この人と話さなければいけない事はまだある。

「それと先生。もう一つお願ひがあるんですけど……」

『何だね。』

「俺は奉仕部を辞めたいと思います。」

『…！』

「今日、ずっと考えてたんです。俺は何が欲しかったのか。何のために生きてきて、これから生きていこうって。」

そして分かつたんです。」

『… それはなんだ？』

「俺はきっと、『本物』が欲しかったんです。」

俺は本物が欲しい。嘘偽りない本当の自分が。曲がった視点から見た世界ではなく、真っ直ぐ純粹な視線で見ることの出来る世界が。

「ただ、それは奉仕部では見つけることは出来なかつた。それだけの事です。」

『気持ちちは変わらないのか？』

「変わりません。」

『そうか…。』

先生はすごく残念そうな声だった。無理もない、自分を奉仕部に入れたのは平塚先生本人なのだから。

『なあ、比企谷。私の話を聞いてくれるか？』

「いいですよ。」

『私はな、最初比企谷みたいな生徒を見つけた時、少し嬉しかったんだ。こんな捻くれた高校生が、まだ雪ノ下しかない奉仕部に入つたら、きっと面白くなるだろうって。問題兎だつた雪ノ下も何か変わるんじやないかって。勿論君もだつたが。』

『ただ結局、それは私自身の自己満足でしかなかつた。その自己満足のせいで、君はさら

に歪んでしまつたんだ…。全部、私のせいです…。』

話し終わる頃には先生は泣いていた。電話越しにその様子が伝わつてくる。  
でも…。

先生、それは違います。

「それは違いますよ先生。誰かが悪い、なんてことはないんですよ。先生も、由比ヶ浜  
も、雪ノ下も。」

依頼をした戸部も。海老名さんも。

「誰もが悪いんですよ。皆一律に。だから誰かに責任をぶつけるのは違うんじゃないですかね。」

『そうか…。』

もうそれ以上は言うことは無かつた。

『最後になるが、この事は由比ヶ浜と雪ノ下には…。』

「今度、学校行つた時に自分から話します。」

『分かつた。では失礼するよ。』

そうして電話は終わつた。

電話を終え自分の病室へ戻る。雪ノ下さんは椅子に座つたまま軽い眠りについていた。

あの時、この人に助けて貰つて始めて自分がはつきりと見えた気がする。  
だからきつとこの人となら…。：

俺は《本物》を見つけるかもしない。

## #7 雪ノ下陽乃が、一步踏み出すには

一陽乃 side-1

はあー… 疲れたあ…

病室の椅子に座つてふつと息をついてそう思う。

こうやつて本心で誰かのために動くのって、ひょっとして初めてかな?  
にしても疲れた。ちょっと休憩!

⋮

「雪ノ下さん、起きてください」

「… ん、あれ?」

いつの間にか閉じていた目を開けると、比企谷くんが覗き込んでいた。

「あ、あれ… ? もしかして寝ちゃつてた?」

「… もしかしなくとも、結構しつかり寝てましたよ。」

「//」

しまった! 弱みを握られた!?

ゆきのしたはるのに100のダメージ!! こうかはばつぐんだ!!

彼から顔を逸らすように時計を見やる。どうやら20分ほど寝てたようだ。  
恥ずかしい……。

「心配しなくとも、寝顔とか撮つてないですよ。」

まるで見透かしてゐるかのようになに比企谷くんが言つた。

「撮つてたら……分かるよね？」

とりあえず笑わなきや…… 笑わなきや……。

「わ、分かってますよ……。怒らないでください頼みますから。」

え？ 笑えてない？

「ねえ比企谷くん。今私どんな顔してる？」

「どうつて、まあ、笑つてはないですね。」

あれ？

まあいいや。とりあえず今は……。

「じゃあ私、今日はそろそろ帰るね。昨日今日帰つてないとなるとさすがにまずいしさ。」

「そうですか。本当に今日はお世話になりました。」

そう言つて比企谷くんは頭を下げる。

「礼はいらないよ。他で賄つてもらうから。」

「わ、分かりますた…。」

拳動不審の比企谷くんに少し笑つて、私は病室を後にしてた。

家に帰つたのは8時くらいだつた。中に入つてみると珍しく母さんがいた。

「ただいま帰りましたー…、あれ、母さん。」

「陽乃、ちょっと来なさい。」

母さんは入つてきた私を見るなりこつちへ来るよう言つた。相変わらず母さんの発言一つ一つには言葉にならない強要性がある。

「何の話?」

「昨日、帰つてこなかつた理由は都築に連絡したことで間違いないのね?」

「うん。道で倒れてた人を救急車呼んで搬送して、その人に付き添つてた。間違いないよ。」

「そう…。」

母さんのその一言には落胆、怒り、喜び、どれとも取れないような意味が込められていた。

「陽乃、何回も言うようだけれど、あなたは雪ノ下なのよ?」

普通の人とは違うの。そこを分かつて過ごしてちょうどいい。」

「はい、母さん。」

「もし、通いつめるくらいにまでなるようなら、あなたの自由行動の制限についても考えます。」

「はい。」

母さんはその一言で話の全てを終わらせ、その場から離れていった。どこに行つたのかは分からぬ。

ああ、もういやだ。

何で私は『雪ノ下』なんだろう。

もつと普通に、自由に生きたい。裕福なだけがきっと幸せじゃないはず。

この『雪ノ下』という名前を持つてはいるだけで、私という人間は特別な存在になつていた。

けれどそれが、1番気に食わない。

結局私は、餌が十分にある鳥籠の中の鳥のようだ。

私は変わりたい。

でも、今はそれが出来ない事は重々承知している。

どうやつたら変われるかなあ‥‥。

ふと、私は「1歩前へ、自分を変える為の魔法」という本を思い出した。

それこそ、中身は読む時間が無く、まだ中身については知らない。

そいえばあの本、病室へ置いたまんまだつたつけ……？  
後で比企谷くんにメール送つておこう。

そう思つてた矢先、メールが届いた。比企谷くんだ。

『雪ノ下さん、そろいえば本忘れて帰つてません?』

『ごめん、忘れてた。明日取りに行こうか。』

『いえ、いつでもいいんですけど、何か思い悩んでいるなら言つておきますね。』

『?』

『きっと人は1人では変われません。きっと俺も、雪ノ下さんも。』

その言葉は今の私に響く言葉だつた。

けど、それは現状の解決にはならない。

『へえ、言うようになつたね。』

『生意気でしたらすいません。ただ、俺はそう思いますよ。では、おやすみなさい。』

『うん、おやすみ。』

携帯を閉じ、自室のベッドへ飛び込むように入つた。

1人では変われない、か。

今まで私に告白してくる人間は沢山いた。

けど、全部上つ面。本当の自分は誰一人見抜けなかつた。

… 比企谷くんなら、分かってくれるのかな？

そうだ、折角だし…。

そう思つてもう一度携帯を取り出す。

相手はもちろん比企谷なんだ。

『ねえ比企谷くん、まだ起きてる？』

『起きてますよ。どうかしましたか？』

いつも誰かに軽い気持ちで送る文より、同じ文を何十倍もの勇気を振り絞つて次の文を綴る。

『今度、デート行かない？』

## #8 けれど今この時だけは

一八幡 side-1

とある休日。

朝7時、家で外出の準備をしながらふと思つた。  
なんでこうなつた…?

あの怪我で入院したとはいつたものの、1週間くらいで退院でき、今はこうして家に  
いる。

とはいえ、まだ怪我が治つた訳でもない。

じやあ、なんのための外出か。

事の発端は、先日雪ノ下さんから送られた

「今度、デート行かない?」

の一通のメールだ。

因みに入院中の話だが、雪ノ下さんと家族以外は見舞いに来ることはなかつた。おそらく、ケースがケースという事で他言しなかつたのだろう。ぼつちにはそつちの方があ

りがたい。

戸塚には今度謝罪と甘いもの用意しどゝ。

そんなこんなでインターほんがなる。どうやら来たようだ。  
「はいはい、出ますよつと。」

独り言を呟いて玄関のドアを開けに行く。

「ひやつはろー比企谷くん。」

「どうもです。」

今日の雪ノ下さんは一段と可愛く見えた。やつぱこの人すごいなあ・・・。

「じゃあ、行こつか！」

「あ、でも待つてください。俺そんな歩けないっすよ。」

実際まだ松葉杖暮らしである。歩かされるとなるとたまつたもんじやない。

雪ノ下さんは得意そうな顔を浮かべる。

「ねえ比企谷くん、面白いこと教えてあげよつか。」

「なんですか？」

「私、自動車免許持つてるよ?」

⋮  
まじで?

「… まじっすか。」

「という訳で、乗った乗った!!」

よく見てみると玄関の先に軽自動車が見える。恐らく雪ノ下さんのものだろう。玄関でそうこうしてゐるうちに、寝起きの小町が起きてきた。

「あれ、陽乃さん。おはようございます。あ、デートですか。ごみいちゃんを宜しくお願ひしますね。」

小町は返事を聞く前にリビングへと入つていった。

： 寝起きじやなればもつと話してたのかもしれない。

小町にもだいぶ迷惑かけてしまつたからな。

今日お土産でも買つて帰るか。

「… ジヤ、行こつか。」

「うす。」

そんな訳で俺は雪ノ下さんの自動車へと乗つた。

車に乗つて數十分たつた。いやどこまで行くんだろうほんと。高速乗つちやつてるし。

少なからず千葉市内ではないことは分かつた。

季節は10月。海に行くなんてのは流石に考えれない。

「そういえば雪ノ下さん、なんで免許なんて持ってるんですか？専属の運転手だつているのに。」

「意外だつたでしょ？」

「いや、それはそうですけど。確か雪ノ下さんのお母さんつて厳しい人なんですよね？よく許可してくれましたね。」

地位もあつて厳しい人なら、尚更自分の娘に万一の危険があるようなことはさせたくないだろう。

「：ほんつと、大変だつたんだよ？説得するのに。」

本当に大変だつた。そんな感じがつたわつてくる声音だつた。

「あたしさー、もつと自由に生きてたいんだよねー。」

吐き捨てるように呟かれた独り言。けど、それは捨てては行けないほど大事な言葉だつた。

「さて、比企谷くん問題です！私達は今何処へ向かつてるでしようか！」

場の空気を一新するように雪ノ下さんが大きな声を出す。

「いや知りませんよ。千葉を抜けたら俺の知識はリセットされるんで。」  
標識を見たところ、ちょうど千葉からでた位のところのようだ。

「んじや、着くまでゆつくり待つてよ。着いてからのお楽しみつてことで♪」  
車に乗つてから2時間経ち、ようやく目的地へ着いた。

「まさか栎木だとは思つてませんでしたよ‥‥。」

今俺は日光にいる。うん、なんんで？

「こつちの方つて来ること無かつたしさ、いいじやんこういうのも。」

「まあ、確かに紅葉が綺麗ですね‥‥。千葉には少なくともここまでのものはないと思い  
ますし。」

実際、言葉にならないほど綺麗だつた。

一面に杣の赤が広がる。それはもう燃えそうなほど赤かつた。

しかし、燃えている火が消えるように、いつかはこの杣も色褪せ、枯れていつてしま  
う。

その循環はまるで人間を見るようだ。

「でも雪ノ下さん、ここに来たのつてこれ見るためだけですか？」

「ううん？ まだまだ色々回るよ？ 東照宮とかも行かないと！」  
「はは、ですよね‥‥。」

それから、日光周辺を色々見て回つた。

さつき述べた東照宮や、輪王寺など、観光名所と呼べるものはいっぱいあつた。怪我

の都合上、残念ながら温泉に行くことはなかつた。「今度、行けたら行こうね」と言われたので考えておきます。

千葉と栃木。同じ関東なのに一体何が違うんだろうか。千葉と東京は同じ平野部として、似ていてる片鱗はある。けどそこからもう一步踏み出せば新しい景色が見えた。  
：自分の世界にも言えた話かもしないな。

そして今は帰りの車内である。

会話数は相変わらず。おまけにどうやら1時間ほど眠つてたようだ。

すいません雪ノ下さん。寝てしまつて。。。

いいよいよ、その状態で結構歩かせたんだから、疲れるのも無理は無いでしょ。」

「……。」  
「……。」

そう言つて雪ノ下さんは笑う。

その笑顔に嘘偽りはない。

けれど。

その笑顔の奥には悲しさが感じられた。

「あのさ、今回の一件についてこの前母さんにきつく言われてさ。もう、当分こういう機会なんてないんじやないかって思うの。だから、今日はデートに来れて本当によかつた。」

「そうですか…。」

「もちろん最後じやないとは思うけどね？」

世界は無常だ。

こんなに大切だと思う時間は刻一刻と過ぎていく。いずれはこの楽しい時間も終わってしまう。

だから、せめて今だけは。

「あの、雪ノ下さん。」

「ん? どうしたの?」

「寄つて欲しい場所があるんです。」

俺が指定したのは家の近くにある公園だ。

この公園は昔から星が綺麗に見えて好きな場所だつた。

今日は星は… 出ているな。

よし。

「で、比企谷くんはなんでこんなとこに寄りたいって言つたのかな?」

「ここから見える星が綺麗でしてね。紹介したかつたんですよ。」「うん、確かに綺麗だね。」

「… 雪ノ下さん、伝えたいことがあります。」

声が震える。緊張で逃げ出したい気分だ。

けど勇気を振り絞つて。真っ直ぐに伝えよう。

ああ、今までの俺が見たら発狂しそうだな。

でも今は全部ぶつけてやる。

「雪ノ下陽乃さん。あなたが好きです。付き合ってください。」

## #9 だから雪ノ下陽乃是自身の運命を呪う

一陽乃 side-1

私は今、比企谷くんとデートに来ている。

まだ怪我が治つてないにも関わらず誘つたのに、彼は来てくれた。

私だつてちゃんとした状態で彼に話したかつた。

けれどもう、時間がない。

数日前母さんに言われた事、それは

「あと2週間以内に、この1件について全て終わらせなさい。」

というものだつた。

どうやら2週間後から、やるべき事が立て続けに入つてるようだ。私もいくらか行かなければいけないらしい。

期限が過ぎればまた私は、『いつもの』雪ノ下陽乃に戻らなければならない。  
そしてこれが、その2週間の中の最後の休日。そして明日が期限の最終日だ。  
だから

彼を誘うのは今しか無かつた。

まだ痛む時があつてもおかしくない。なんで彼は来てくれたんだろう？  
いや、そんなことはどうでもいいや。  
今は楽しもう。ただそれだけだ。

⋮

そして今は帰りの車内だ。

私は、一応はあるが車の免許は取つてゐる。もしも、自分が普通の女として生きれたら。そんな望みを少しでも叶えるために手に入れた。

少し母さんに反抗心を見せようと思ったのも理由の一つだけど。

そんな私の車の助手席で比企谷くんは眠つていた。

結構深めに寝ているようだ。よっぽど疲れたのだろう。

1時間ほどたつた頃、比企谷くんは目を覚ましたようだ。

「すいません雪ノ下さん。寝てしまつて⋮。」

「いいよいよ、その状態で結構歩かせたんだから、疲れるのも無理は無いでしょ。」

「⋮まあ。でも、今日は楽しかつたんで良かったです。」

嘘をつかないところが彼らしい。そこは変わらず好きだ。

「そつか。楽しんでくれてよかつたな。」

そう言つて笑顔を見せる。

けど、

とても悲しかつた。だつてこの時間はもうじき終わつてしまふ。  
彼とこうやつてゆつくり話せる時間もないだろう。

だつたらせめて、その旨は彼に言つておこう。

「あのさ、今回の一件についてこの前母さんにきつく言われてさ。もう、当分こういう機会なんてないんじやないかつて思うの。だから、今日はデートに来れて本当によかつた。」

「そうですか…。」

彼は少し残念そうだつた。

「もちろん最後じゃないとは思うけどね?」

取り繕うように慌てて言葉を出す。けど、嘘だ。

最後の可能性は十分ある。

『雪ノ下』陽乃に戻つてしまつて時間を過ごせば、いつか好きでもない人間と結婚させら

れるという事も考えれる。

…。

そんな中、比企谷くんが声をかけてきた。

「あの、雪ノ下さん。」

「ん？ どうしたの？」

「寄つて欲しい場所があるんです。」

指定されたのは何の変哲もない公園だつた。

「で、比企谷くんはなんでこんなとこに寄りたいって言つたのかな？」

「ここから見える星が綺麗でしてね。紹介したかつたんですよ。」

「うん、確かに綺麗だね。」

そう言つて夜空を見上げる。頭上には沢山の星が輝いていた。  
千葉にもこんな場所あつたんだなあ……。

身近で、でも気づかない。きっとそれは、私が人とは違うからだろう。

「……雪ノ下さん、伝えたいことがあります。」

彼は震え声でそう言つた。拳を強く握つてるのが分かる。

私は、ちゃんと聞くことに決めた。

「雪ノ下陽乃さん。あなたが好きです。付き合つてください。」

一瞬、息が止まつた。そして確認する。

私は今、告白されたんだよね？嘘じやないよね？

とても嬉しかつた。自分が想いを寄せている人からの、こんなにも素敵な告白だつたから。

けど…

「…ごめんね比企谷くん。君の気持ちは嬉しい。けど、もう少しだけ待つて欲しいな？」

私はぎこちない表情で言う。

「…それはまた、結構かかりそうなんですね。いいですよ。待ちます。」

彼は表情から私の心境を読み取り、また、受け入れてくれた。

「じゃあ俺はこのまま帰ります。今日はありがとうございました。」

そう言つて比企谷くんは何事も無かつたかのように家へ向かつた。

わかつてるよ。ほんとはしんどいこと。

「じゃあ、私も帰んないとだな。」

荒む心を抑えつつ、今は車へ向かう。ダメだよ、今は抑えないと。

私は家に着くなり自分の部屋へこもつた。

幸い今は誰もいなく、ありのままでいられた。

そしてベッドにうつぶせになるように体を預ける。

そうしたら、ずっと抑えてたものが溢れて堪えられなくなつた。

頬を無数の涙が伝う。

「ねえ比企谷くん……。こんなのがつてないよね……。」

私は誰もいない空間に1人話し出した。

「告白、すごく嬉しかった……。すぐにでもOKを出したかった。なのに……」

「なのに、私は『雪ノ下』の名前を背負つてるだけで、こんなにも好きな人を愛せないの？」

未だに涙が止まらない。少しづつ嗚咽も混ざつてきた。

「ねえ……なんで、なんでなの……！」

声をなるべく上げないようにして泣きたかった。けど、そんなことはもう無理だった。

だから、せめて声が漏れないようにと枕に顔を埋めた。

「ううっ、うううう……」

……。

それから20分が過ぎた。

少しずつだけど、心も落ち着いてきた。

とりあえず、真っ赤に腫らした目を洗いに洗面所へ向かう。顔を洗つてパシンッと1回、両手で自分の頬を叩く。

きっと彼は明日奉仕部に行くのだろう。

彼自身が変わる最後の1歩のために。

私はとりあえずそれを見届けて、彼の前から消えよう。

ほんの僅かな可能性だけど、いつか、彼の隣で歩けるように。

# #10 1歩ずつでも比企谷八幡は変わっていく

—八幡 side —

「待つて」、か。

告白された陽乃さんからの返事はこうだつた。

訓練されたぼつちならこんな言葉に期待なんてしないだろう。  
けど、たつた数日ではあるけども。

自分に全てをかけてくれた人の「待つて」の言葉は、期待してしまつてもおかしくな  
い。

多分、またゆつくり話せる日は遠くなるだろう。  
だから、待ち続けることにしよう。

「ただいまー。」

「おかれりーお兄ちゃん。」

リビングの方から小町の声が聞こえる。何?迎えに来てきれないとか冷たくない?  
：まあ、気にしないけどね。

とりあえず荷物は持ったままリビングに入る。小町はソファに寝転がっていた。

「おかえり、お兄ちゃん。どうだつた？ デート。ちゃんと告白して帰ってきたんだよね？ してなかつたら小町的にポイント、チョー低いからね？」

「おう、告白したぞ？」

小町はこれ以上にないくらいキヨトンとしていた。

「… お兄ちゃん、マジで言つてんの？」

「バカ、千葉の兄貴は嘘つかねえぞ。ちゃんと一言一句伝えたからな。」

「へー… ヘタレのお兄ちゃんがねえ…。」

「るつせ。」

悪口を吐きつつ、小町は内心嬉しそうだつた。

「んでんで、結果はどうだつた？」

さあ、なんと言つたものか…。

「あー… そのー… なんだ。待つてくれ。つて言われた。」

「そか。」

小町は落胆とも歓喜ともつかない表情をした。実際俺だつてどうすればいいかわからぬ状況だ。無理もない。

「でもね、小町、ちょっと嬉しいんだ。」

小町は下を向いて語り出した。

「修学旅行が終わってさ、お兄ちゃん、少しずつ暗くなつていつたじやん？そしてあんなことが起こつた時、小町ずっと思つてたの。なんで、お兄ちゃんは幸せになれないのつて。そんな時、陽乃さんが現れてくれて。それからずつと陽乃さんがお兄ちゃんに尽くしてくれて、陽乃さんならお兄ちゃんを幸せにしてくれるなんて思つて。そして、今日。お兄ちゃんがその想いから逃げずに幸せになろうとした事が。小町、すごく嬉しかったんだ。」

瞳が潤んでいる。小町は今にも泣きそうだ。

俺はそんな小町の頭を一回ポンと叩いた。

「すまんな。いつも迷惑かけてばかりで。」「ホントだよ。全くごみいぢやんは。」

小町の頭をもう一回ポンと叩いて俺は立ち上がった。

「んじや、俺は片付けの方行つてくるわ。お土産はテーブルの上置いとくからな。」「うん。ねえお兄ちゃん。」「ん、なんだ？」

ドアから出る前に小町に呼び止められる。  
「なつてね。幸せに。」

「…ああ。」

そう言つて俺はリビングをあとにした。

次の日、いつもよりちよつと早い時間で学校に向かつた。

怪我はまだ治つてないので親に送つてもらつた。親父。すまん。

さて、教室に入る。しばらくしないうちにザワザワと聞こえ始めた。多分俺の噂で間違いないだろう。

して、席について数分後。由比ヶ浜が俺の机近くによつてきた。

「ねえヒツキー… その…。」

「すまん、話はまとめて放課後にさせてくれ。ちよつとこのザワついた空気じや言うもんも言えねえ。」

「そつか、そだよね。」

そう言つて由比ヶ浜は席へ戻つて行つた。

もちろん、今日、全てを話しそして、

全てを終わらせるつもりだ。

因みに三浦達のグループはほぼ活動していなかつた。

大岡と大和の席は無くなつていた。まあ、どうでもいいけど。

そして、由比ヶ浜が離れて数分もしないうちに次の客が来た。ラブリーマイエンジエルとつかたんだ。

が、今は少し怒った表情でいらつしやる。

「ねえ八幡。あの日僕がなんて言つたか覚えてるよね？」

「はい……」

「もつと周りをたよつてよ。少なくとも僕は八幡の力になりたいから。」

悲しげな声で戸塚が言つた。その通り、である。

「悪かつたな。結局抱え込んで迷惑かけちまつて。」

今まででは嘘でしか言えなかつた言葉が、今日は心から言えた。

「ううん、分かつてくれればいいんだよ。」

そう言つて戸塚は笑顔を見せる。やつぱり戸塚はこの笑顔であつて欲しい。

また数分もしないうちに更にお客は訪れる。俺はそんなの望んではいないのだが。

「やあ、比企谷くん。」

その声の持ち主は、今回の事の発端の友人であり、その居場所を失つたものであり、今もつとも俺を憎んでいるであろう人だつた。

「葉山……」

「ちょっと、話をしないか？」

葉山に連れられて俺は屋上へ向かつた。まだ時間には余裕がある。

「で、話はなんだ。恨み言か？まあ、俺のせいでお前の居場所がなくなつちまつた訳だからな。恨まれる覚えはあるが。」

「そんなんじやないさ。少なくとも、俺は君を恨んでなんかいない。それよりまず、謝らせてくれ。本当に済まなかつた…！」

葉山は頭を下げる。ただ、こいつも色々と被害者のようなものだ。実際、大岡と大和の行動は把握出来ていなかつたそうだ。

「おいおい謝る必要ないだろ。お前がやつた訳じやあるまいし。とりあえず頭上げてくれ。」

そう言われて葉山はゆつくりと頭を上げた。

少し間が空いて、葉山が話を切り出す。

「なあ比企谷くん。それまであつた場所が急になくなるつて、どんなんだろうな。」「さあな。そもそも俺はそんな経験がなかつたからな。」

「俺は、自分がいた場所があんなに脆かつたなんて、気にしたこともなかつた。…やつぱり、君の言う通りだつたんだな。所詮、上辺だけだつたんだつて。」

「…はあ。」

「なあ比企谷くん。教えてくれ。どうやつたら君みたいに強くいられるんだ？」

何を勘違いしてるんだこの男は。

俺は強くなんてない。それどころかこの前弱さを露呈したばかりだ。

ただ、今の俺になら言えることはあるか。

「：俺は別に強くなんかない。寧ろこの前弱さを実感したばつかだ。だが、俺みたいにいたいって思うお前に言えることは一つある。」

俺が変わるきっかけを作った人にも伝えたい言葉を、今はこのどうしようもなくダメな男に伝える。

「自分が生きたいように、なりたいように生きろ。そしたら結果はついてくる。良かれ悪かれな。そうだな…。まず、みんなに望まれる人間というのが本心じやないなら、その生き方は間違いだ、とかな。」

葉山は少し驚いた表情をしていた。

「君は、少し変わったな。」

「何がだよ。」

「少なくとも、こうやって面と向かつて本心を話すような君じやなかつたはずだ。」

確かにそうだったかもな。

「：俺だって、変わりたいんだよ。」

誰にも聞こえないように呟く。

素直に本心を吐き出したせいか、朝の風が、少し気持ちよく感じた。  
「話聞いてもらつて悪がつたね。俺は先に戻つてるとするよ。」

そう言つて葉山は屋上を後にする。屋上にいるのは俺一人になつた。  
ふうつと一息ついて心の整理をする。

俺は変わりたい。その想いだけは変わらない。

例えその先が凄まじいイバラの道であろうと、それでも……。

それでも俺は、《本物》が欲しい。

## #11 だから比企谷八幡は

一八幡 side-1

捻くれた性格の自分を構成するという名目で強制的に入れられた部活、奉仕部。雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣とそこで過ごした時間は悪くなかった。けど、俺は結局ここで変わることはできなかつた。きっと居続けても変わることは出来ないだろう。だから、奉仕部に別れを告げることにした。

比企谷八幡という男が、変わるために。

ということを、なんて言おうか考え続けるうちに、気づけば放課後になつてしまつていた。やばい、時間ない……。

「由比ヶ浜、先行つてろ。後から行くから。」

とりあえず何か言われる前に先手を打つておく。これで少し時間は稼げるはずだ。

「あ、うん。分かつた。」

とりあえず返事は返してくれた。うし、じやあ気持ちの整理と言葉の整理だな。

が、結局考えきれず、部室に行つて話をしながら考えることにした。という訳で、部活に向かう。

その道中、職員室前廊下でよく見なれた服装、姿の人を見た。雪ノ下さんと平塚先生のようだ。

なにか二人で話しているが、笑顔は見られない。なら、割り込みはよそう。あえてそのふたりがいる場所を避けるようにして部室へ向かう。

部室の前まで着いた。

とりあえず1回深呼吸を行う。

すう…ふう…。

よし、行くか。

ガララと音を立てドアが開く。聞きなれた音だ。

「… よう。」

中を見回す。雪ノ下も由比ヶ浜もそこにはいた。

「ヒッキー…。」

「比企谷くん…。」

2人して呼びづらそうに俺の名を呼ぶ。まあ、こんなことがあれば無理もない。

「とりあえず座つてもらえるかしら、比企谷くん。」

いつもよりトゲトゲしてない雪ノ下の声に座るよう諭される。

「あー、その事なんだけどな……」

「何、どしたの？」

由比ヶ浜が不安そうに尋ねる。

「俺は、今日をもつて奉仕部をやめる。今日はそれを伝えに来ただけだ。」

「えつ……？」

「…」

部室に緊張が走る。けれど、話はここからだ。

「冗談だよね……？ねえヒツキー……！」

「いや、これは俺の本心だ。嘘なんかはない。」

「ねえ何で？私達があの時否定したから？それとも別の何か？ねえ何でなの……!?」

「違う、そうじやねえんだ。誰が悪いとかじやねえんだよ。」

由比ヶ浜は泣きそうな顔で下を向く。変わりにそれまで黙っていた雪ノ下が口を開いた。

「… 私達はまだあなたの更生の依頼を終えていないわ。だからそんなこと……」

その時再びドアが開いた。平塚先生だ。

「私が認めた。」

雪ノ下は驚いた表情で平塚先生を見る。

「それは、この男の更生がもう終わつたという見解ですか？」

「いや、そう思つてはいない。だが……」

そう言つて平塚先生は俺の方を見やる。ここからは俺の番か。

「俺は今回の問題を経て、自分に接してくれた人として、初めて変わりたいと心の底から思つた。素直な見方をもつた、『本物』の比企谷八幡になろうと思つた。けどな……」

一旦言葉を区切る。雪ノ下は口出ししようとはしてないようだ。ちゃんと聞いてくれる分ありがたい。

「けど、それはこの場所じや見つからない。そう思つた。だから俺は奉仕部をやめる事にした。」

「……どうして、ここでは見つからないって思うのかしら。」

「これまでできた依頼、覚えてるか？それをどうやって解決したか覚えてるか？」

川崎のことや、材木座のこと。確かにこれらは自分の意思でどうにかなるものだつた。でも、千葉村や、相模の一件、そして今回もそう。誰かを犠牲にしなければ、誰かが傷つかなければ解決へ導かれない問題があるので。

「俺は、自分を犠牲にして解決への手立てにした。でも今は自分をもつと大切にしたい

と思うようになつた。けれどここに来る依頼がそれを縛る。だから……

『逃げる』というのね……』

「そうね、逃げだね。」

また新しい声がした。今度は雪ノ下さんだ。

「姉さん……！」

「でもね雪乃ちゃん。あなたの行つての『逃げ』よりは全然比企谷くんのやつてることが正しいと思う。比企谷くんは自分で変わるため、自分を犠牲にすることから、奉仕部から逃げることにした。立派なことだよ。自分から変わろうなんて。それに比べて雪乃ちゃんはどう? 素直になることから逃げて、また1人になるんだよ。なんで、気づかないかな……。」

最後の方は声が消えてしまつたため聞き取れなかつたけど、雪ノ下さんは俺が思つてることをちゃんと伝えてくれた。

「……という訳だ。納得してくれなくともいい。けど俺は変わることを選ぶ。それだけだ。」

そしてもうひとつ、伝えるべきことを伝えてここから消えよう。

思い出との決別の為に。別れとして区切るために。

「……で過ごした時間は悪くなかった。今までありがとな。」

由比ヶ浜は一人泣き、平塚先生も雪ノ下ももう黙つていた。  
終わりか。

奉仕部の部室に背中を向けて歩き出す。振り向くことは無い。

誰にも聞こえないよう呟いて、1歩、また1歩歩き出す。

数分後、後を追つてきた由比ヶ浜と少し話した後、校門を出ると雪ノ下さんが待つていた。

「やあ、比企谷くん。」

「どうもです。」

さつきもあつたんだけどね。：

「結局、私は君の居場所を壊してしまったね。」

「雪ノ下さんは何もやつてないですよ。そもそも、いつかは終わらなければいけなかつたんですから。それに……」

それに？」

「今は今で新しい居場所がある。そんな気がするんです。」

「…そつか。」

雪ノ下さんは悲しげに答えた。理由はなんとなく分かる。

「…ねえ比企谷くん。多分、こうやって面と向かってゆっくり話すのは今日で最後かもしれない。少なくとも、当分は会えないかなって思うの。」

「昨日の話ですか。」

「うん、だから告白の返事もまだ待つてもらうことになると思う。それでも、待つの？」  
そんなこと、決まっている。

「待ちますよ。ずっと。次の機会まで。」

「…ありがと。」

そう言つて雪ノ下さんは少し黙り込む。そして、また動き出す。

「じゃあさ比企谷くん。別れの前に渡したいものがあるからこっち来て。」

そう言つて雪ノ下さんはちよいちよいとこっちへ招く。

俺は言われるがままに近づいていく。

だいぶ距離を詰めたその時だつた。

自分の唇に柔らかいものが当たつた気がした。

「!!」

そしてそれが雪ノ下さんの唇だということを理解した。

「これが渡したかつたものだよ。どうだつたファーストキスは？」

「え、ええ…。」

「ふふ、可愛いよ。」

やつぱり最後までこの人は侮れない。

「じゃあね比企谷くん。また会えたらい面白い話聞かせてね！」

そして最後は笑顔で。

雪ノ下さんは背中を向け帰つていった。

きつと俺の青春ラブコメはまちがつているはずだ。今まで、そしてこれからも。  
だけど俺は変わり続けよう。本物になるために。そして…  
自分を変えてくれた、仮面の少女の為に。

# m a i n   s t o r y 『N E X T』

#1, そして2人は再び巡り会う

一陽乃 s i d e l

あれから半年がたつた。

あれからの私は、それこそ今までどおり、それ以上に母親の言う通りに生きてきた。  
それこそ人形と言うに相応しかつた。

もちろん比企谷くんに会うこともなかつた。見つけても自分から避けるようにして  
たから、向こうにも気づかれていない。

これでよかつたのかな……？

そんな答えのない考えを抱きながら、今は過ごしている。

そして今日もいつも通り、大学からの帰りだ。

私もあと少しすれば3年生になる。それはつまり、少しでも『自由』で生きていられ  
る時間が減っていくという事だ。

今は雨が降っている。大通りを通っていたら車で跳ねてきた水が当たるかもしけな  
いと思い、人通りのない細道へ入つていった。

そして数十歩歩いた頃だつた。

「雪ノ下ああああああああああ!!」

えつ？ 何？ ！？

急に背後から叫び声が聞こえた。

驚いて振り向こうとした時、足がもつれ尻もちを着いてしまつた。濡れたアスファルトの冷たい感触が伝つてくる。

その男は自分に面識のない人間だつた。片手に包丁を持つていて、こつちへ走つて向かつてきている。

しまつた…！ 距離をつけないと…！

そう思つて立ち上がるうとしたが、立てない。急の出来事で腰が抜けてしまつたようだ。

そしてここは人気のない細道だ。誰か来る気配もない。

「…………あ」

悲鳴をあげようとしたがパニックで声も出なくなつてしまつていてもはやパニックで冷静な判断が出来ないでいた。

「死ねえええ！ 雪ノ下あああ！！」

その男は自分に向かつて包丁を突き刺そうとしてきた。

やだ…。怖い…。助けて…！

そう思つて私は目をつぶつた。

ブスツ

無慈悲に包丁の刺さる音がした。  
けれど

痛みは感じなかつた。

そして恐る恐る目を開いた先には…。

一八幡 side-1

あれから半年がたつた。

俺はと言うと割と元気でやつていけている。

放課後については特に予定は無いが、最近は戸塚の練習相手になつたりなどをやつて、十分楽しいと思える生活をしている。

曰く、「あまり目が死んでいない」 そうだ。（小町談）

由比ヶ浜も三浦、海老名さんたちと上手くやつてるようだ。

雪ノ下については…、俺にも分からぬ。

だが、こうしてそれぞれの道に進む現状にも慣れ、今はこれでいいと思つてゐる。

俺は変われた。

その理由を作つてくれたのは、紛れもない雪ノ下さんだ。

だから今度は自分が、あの人を助ける番だと思つてゐる。

あれから会うことは出来てないが、半年たつた今でもあの人人が好きなことには変わりない。

その日は雨が降つていた。朝から続く長く嫌な雨だつた。

雨とわかつていていたのでチャリには乗つてきていない。

(いつ直してもらつたかは言う必要ないよね?)

という訳で、今日の帰りは徒步だ。

放課後の予定は特ないので、とりあえず学校から出る。

が、このまま帰るのは何故か嫌だつたので、書店で面白い本がないか探すことにしてた。

書店は丁度新年度に向けたセールを行つてた。

新年度向けのセールって何だよとか思つてはいたが、割と内容ははつきりしていて、

参考書などが新しいものに変わつていたりなどしていた。

自分ももうそろそろ高3になる。

勉強の方だが、何故かあれからいつそう力が入つてしまい、理数系も問題ない程度ま

ででき、国公立文系大学が今の所志望になつてゐる。

そんなわけで、今は参考書はいらない。そう思つて参考書コーナーを素通りした。

店内を1周見て回つた。

しかし、お気に召すものや連載物の続編などはなかつた。

特にこれといつていい本はなかつたし、帰るか。

そう思つて店の出口へ向かう。その時、一冊の本が目に入つた。

「1歩先へ、自分を変える魔法」

懐かしい。

それが1番最初に出た感想だつた。

この本には結局答えは書いてない。ヒントですら危ういくらいだ。だが。

今ならこの本の答えが分かる気がする。変わるために何が必要か。

けど、言う必要も無いので胸の中に閉まつておこう。

再び曇天の街へと出ていった。雨はさつきより少し強くなつてゐる。

こちら辺の通りは車通り、人通りともに多い。

水たまりなんかできてる日にやあ・ね?

こういう時は千葉loveお兄さんの土地勘を利用して細道を回つて帰るのがベス  
トだ。

そう思つて細道へ足を踏み入れる。その時だつた。

「雪ノ下ああああああああ!!!」

どこからか叫び声がし、驚いて辺りを見回す。

特に人は見えない。どうやら1つ2つ隣の道のようだ。

てめえ今さつき、雪ノ下つつたよな？

背中に冷や汗が走る。あの叫び方は間違いく危ない人間だ。

自分の知つてる人が襲われるとなると…。

気がつけば走つていた。

くそつ、どこだ？

手当り次第に探すしかない。そう思つて自分の今いる細道を左に曲がる。

そしてそこには尻もちを着いた雪ノ下さんが見えていた。

距離は50mもない。が、混乱状態でこつちには気づいていないようだ。

この細道は人通りがてんでない。事件があつても気づかれにくく、もしもの事があつても通報などが遅くなるかもしれない。

だから今のうちに手は打たねば。

そう思つて俺は即座に携帯を取り出し小町にメールを入れる。

《急いで警察と救急を呼んでくれ。場所は千葉市○○だ。頼む》

返事を返してもらう前に携帯をさつさとしまい、全力でダツシユする。

「死ねえええ！雪ノ下あああ！」

やつと見えた男は包丁を突き刺そうとしていた。  
まずい、どうやつたら止めれる？

一瞬考えたがそんな時間はない。

俺は咄嗟に雪ノ下さんの前に身体を差し出した。

そして

ブスツ

その包丁は無慈悲に俺の身体を突き刺していくた。

## #2, ただ、雪ノ下陽乃是

一陽乃 side

あの日からずっと想いを寄せていた愛しい人。  
別れは告げたはずなのに恋しくて。

もう会うことなんてないと思つてた。

でも目の前の世界にはあの日と同じ彼がいた。

『服を血で濡らした』彼が。

えつ…いやつ…

「いやああああああああああああああああああああ!!!」

私は絶叫した。普通ならすごく痛みを感じるくらいの声で叫んだが、今はそんな痛み  
すら感じなかつた。それよりも目の前の彼の痛みの方が遥かに自分に来ているからだ。

私の身体が刺されたわけじゃないのに、刺されたように鋭く心が痛んでいる。

『雪ノ下さん…！とりあえず離れて…ください…！』

彼は男が包丁を持っている方の手を掴み

「あああああ…！」

声とともに男を押し倒した。その時、包丁がさらに深く彼の身体に刺さり込む。

それでも彼は男を押さえ込み続けた。

「くそっ！ガキが!!離しやがれ!!!」

男がもがき、抵抗していたが彼はピクリとも動かなかつた。そして無理して作つた笑顔をこつちに向ける。

その顔にはもう血の氣がなかつた。

いや… もうやめて…

声はかけられなかつた。どうやら思考回路が止まつてしまつたらしい。私は何も出来ず、座り込んだままだつた。

数分くらいたつた頃だろうか。近くでサイレンの音が聞こえだした。どうやら救急と警察が来たみたいだ。

「くそっ！来やがつたか！どきやがれつてんだ！」

男はやつとの思いで押さえ込んでいた彼の身体から抜け、道を引き返すように逃げていつた。が、警察がもう到着していたみたいで、捕まつっていた。

「大丈夫ですか!!」

救急隊の人が別方向から担架を持つて走つて向かつてくる。この細道はどうやら車は通れないようだ。

「あつ……、雪ノ下……さん……。とりあえず……救急……呼んで……大丈夫……か  
ら……。」

彼の声は次第に途切れ途切れになつていき、ついには何も言わなくなり、そのまま目を  
つぶつた。

「あつ……いやつ……！」

「いや……いや……死なないで……！」

「大丈夫ですか!!」

再び救急隊の人の声がした。もうここまで来たようだ。

少し安心したのか、ちよつと眠たくなつてきた。

そして意識は少しずつ薄れていき、いつの間にか  
意識を失つていた。

——数時間後——

目が覚めたそこは病院だつた。

救急搬送なんて初めてだつたけど、意識がなかつたせいでそんなことは覚えてなかつ

た。

それより彼は……？

「比企谷くん……」

力なく呟く。返事なんて帰つてくるわけじゃないのに。  
「はい？」

しかし返事は帰つてきた。

そしてその返事は、聞き覚えのある声だった。  
え？どこ？

急いで辺りを見回す。

「ああ、ここですよ、ここ。」

隣のベッドのカーテンが開く。

そして彼はそこにいた。

「え？なんで……？」

一八幡 side

さて、飛び出してきたはいいものの……参つたなこりや。

自分の身体には包丁が刺さっている。ただ、1番驚いているのは、この状況で異常な程に冷静な判断が出来てている自分自身だつた。

何故か痛みは感じない。こういう時、アドレナリンは本当に役にたつ。  
そんなことはどうでもいい。とりあえず今まずすべき事は……。

「雪ノ下さん……！ととりあえず離れて……ください……！」

俺は雪ノ下さんに逃げることを催促した。腹周りが刺されているようで、声が途切れ途切れになる。が、まだ平静は保つているようだ。

「あああああ！！」

そのまま声を出しながら男が包丁を持っている手を掴み、地面に押し倒した。さらに包丁が奥深く突き刺さる。流石に痛みが伝わる。

「……！」

声にならない悲鳴をあげる。けど今は抑えなければ。

そこからはもう何も考えないことにした。

雪ノ下さんを守ること。男を抑え込むこと。

脳に残っていた指令だけに従つて無我夢中で動いた。

男がなにか喚いているが聞こえない。

ただ、遠くから聞こえるサイレンだけは耳に入ってきた。

そしてその一瞬。油断してしまったのかもしれない。男は俺の抑え込みを抜けていき、そのまま逃げていった。

(くそつ、逃げるな…！)

が、もう身体が限界を迎えていた。血を出しすぎたのかもしれない。立つことができなかつた。

ただ、遠目に男が捕まつた様子が見えた。とりあえず一件落着である。

雪ノ下さんは固まつて動かなくなつてしまつていて。まずい。何か伝えなければ。

「あつ…、雪ノ下…さん…。とりあえず… 救急… 呼んで… 大丈夫… ら…。」

やつとの思いで声が出るくらいしか、もう力は残つてなかつたようだ。

さて、今は休憩するか…。

もう身体を使う気力がなかつた俺は意識を失い…

数ヶ月前とおなじ病室で目が覚めた。

…ええ？

とりあえずまた辺りを見回す。時計の針は5時を指していた。が、明かりがないあた

りどうやら朝だろう。

特にやることもないでの、傷口の周りを見ている。そこには痛々しい手術の跡があつた。

はあ… また入院か。すまんな小町。お兄ちゃんこんなで。

そんな他愛もないこと思つている頃だつた。

隣のベッドからゴソゴソと音がした。どうやら起きたみたいだ。

そういえば、前回は病室に他の人はいなかつたのだが、今回はいるらしい。  
「比企谷くん…」

聞き覚えのある人の声が聞こえた。が、その声に元気はない。

「はい？」

とりあえず返事は返しておいた。すると隣から更に音が聞こえ出す。俺を探してい  
るみたいだ。

「ああ、ここですよここ。」

そう言つてカーテンを開ける。そこには焦つた様子の雪ノ下さんがいた。

「え？ なんで？」

雪ノ下さんはとても驚いていた。まあ、普通は起きるのに時間のかかるような傷だ。  
刺された位置がよかつたとしか言い様がない。

「まあ、運が良かつたんだと思ひます……」  
「そつか……」

雪ノ下さんは俯いて何も言わなくなつた。そしてせき止めていたものが溢れたかのように泣き出した。

「よかつた……死なないで……よかつたよ……。」

「そこまで深い怪我じやないつすよ。だからそんなに泣かないでください。」

しかし雪ノ下さんは泣き止まなかつた。それどころか強くなつていくばかりだつた。  
「もうやだ……もうやだよお……！なんで……普通に生きれないの……！なんで『雪ノ下』なの……！命を狙われないと云ひないの……！ただの女の子として……生きさせてよお……！」

そこに仮面をつけた雪ノ下さんはもういなかつた。そこにいたのはただ一人の、心の弱い少女だつた。

ああそうか。雪ノ下さんが抱え込んでいたものはこんなに大きかつたんだ。

それに雪ノ下さんは決して強くなんてない。こんなものを引きずつていたまま生きてきたこの20年で、もとよりの自分が壊れてしまつていたのだろう。

ただ、今、壊れた自分を取り戻しているのなら。

遠慮はいらない、もつと心に素直になればいい。

俺はまだ少し痛む身体を起こして雪ノ下さんのベッドに近づいて、そのまま雪ノ下さんの身体をそつと抱き締めた。

「今はもつと泣いていいですよ。大丈夫です。全部受止めますから。」

「比企谷くん……」

その一言で充分だつたようだ。

それから雪ノ下さんは壊れたように泣き続けた。

## #3, きっと雪ノ下陽乃の幸せの音色は

—陽乃 side —

あれからどれだけ泣いただろう。

今まで溜め込んでいた涙が全て流れたような気分だ。おかげで胸に残つてたものが今は無い。

その間、比企谷くんはずつとそばにいてくれた。とてもありがたかった。  
そして、全て流し終えて初めて自分の気持ちが改まって分かってきた。  
その思いの丈を比企谷に言おう。

「ねえ… 比企谷くん…。」

少し強く彼の袖を引っ張る。彼は直ぐに気づいてくれた。

「あ、もう大丈夫ですか？なら、良かつたです。」

「そうじやなくて…まあ、それもあるけど…。」

彼はふうっと短い息を吐いた。

「言いたいこと、あるんですよ。いいですよ。聞きます。」

「うん、あのさ…。何回も言つてるようだ。私は変わりたい。雪ノ下の名前を捨てて自

由に生きたい。けど、そんな道なんてあるのかな……。」

「…ありますよ。」

彼の答えはY e sだった。

「俺はあるの日をもつて変われました。それはもちろん陽乃さんのおかげだと思つてます。それに…。」

彼は続ける。

「いつか雪ノ下さんが持つていた本。一見、答えが書いてない様に見えて、実は簡単なことが答えだつたんです。そしてそれは誰にでもできることだと思いますよ。」

彼は少し勿体ぶるように話した。今はちゃんと話して欲しいものだけど。

「…教えて欲しい。ダメ?」

「別に隠すつもりは無いですけどね…。いいですよ。」

『変わるために必要なこと。それは、今ある居場所を全て壊すことです。』

彼はそう告げた。

壊す…。雪ノ下という名前を…？

私は戸惑つた。それはきっと、答えが大胆だつたからに違ひない。

私にそれができるの…？

不安で拳が震える。その拳の上からそつと彼は自分の手を重ねた。

「本当に変わりたいならこうするしかないんです。それまでの過去は全部なくなっちゃいますけど‥‥。大丈夫ですよ。雪ノ下さんなら、仮面がなくても雪ノ下さんはきっと強いですか？」

励まし。

一度もなかつたそんな言葉。それはとても暖かかつた。

うん、私ならできる。やつてやる。

心の底からそう思えてきた。

「分かつた。じゃあ、改めて力を貸してくれることを依頼していいかな？」  
「喜んで‥‥ つ！」

彼は傷口の方に手を当てた。まだ痛いのだろう。

「‥‥ くれぐれも無理はしないようにお願いします。」

時刻は6時前。もうすぐ夜が明ける。

——数時間後——

それからどういう事をやればいいのか、具体的に話し合った。幸い、親の見舞いはもう少し時間がかかるようだ。

「まあ、俺が事故した時親は3日くらい来ませんでしたけどね」と、どつかの誰かが言つた。うん、ドンマイ。

時刻は昼を回り、気づけば14時になつていた。

その時、病室のドアが開いた。

「お兄ちゃん、見舞いに来たよーつてあれ、陽乃さん。」

「ひやつはろー、小町ちゃん。」

入つてきたのは小町ちやんだつた。手にはMAXコーヒーが二三本入つたビニール袋を持つている。

「あれ、今日学校早かつたのか。」

「一応午前中で終わりだつたからねー。あとこれお見舞いね♪」

そしてそのビニール袋を彼に渡した。

でも、お見舞いに缶コーヒーって聞いたことない……。

「ねえ比企谷くん。お見舞いそれでいいの？」

「何言つてるんですか。これがいいんすよ。MAXコーヒー好きにはきっと悪い人いませんし。」

「いいんですよ陽乃さん。こつちの方々が兄的に金もかからず心に逆らわずにwinwinですから。」

「… そういうことです。」

彼は渋い顔をしていた。けどそこに嫌気は感じられない。これが彼の普通なんだろ  
う。

そういうの、ちょっと憧れるなあ…。

「そういえば陽乃さん。前々から話したかったことが山ほどあるんですけど、聞いてく  
れますか？」

小町ちゃんは急にこつちを向くなり真剣な顔付きで話しかけてきた。

「うん、いいよ。」

「まず最初に…。あの時は兄のこと、本当にありがとうございました。」

小町ちゃんは深々と頭を下げる。

「いいよいよ礼なんて。とりあえず頭上げて。」

小町ちゃんは頭を上げるなり話を続けた。

「あの時、誰もお兄ちゃんの味方はいないのかなって思ってたんです。でも、実際は陽乃  
さん達がいてくれて、今こうしていつも通りでいられるんです。だから… 本当にあり  
がとうございました。」

「…」

遠目に見た比企谷くんは少し顔を赤くして照れていた。

これは気持ちの代弁だつたのかもしれない。

「そつか。それはありがとね。けど、私は小町ちゃんにひとつ謝らなければいけないね。… 今回のこと。」

「いや、兄なら大丈夫ですよ。家の事ならさほど困つてないですし（寧ろちょっと気が楽ですし）、まあ、また運ばれたつて聞いた時はびっくりしたんですけど今回はケースバイケースつてことで別に問題ないですよ。」

「… ねえ小町ちゃん。さつきしれつとひどいこと言わなかつた？」

彼が突つ込むが見事にスルーされた。

「そう。それならよかつた。」

「そういえば陽乃さん。小町、総武高校受かつたんですよーー！」

「へー、おめでとう！」

「それで質問なんんですけどーー…」

こうして他愛のないおしゃべりは40分くらい続いた。比企谷くんは最初本を読んでいたがいつの間にか寝てしまつたようだ。

「あ、もうこんな時間ですね。小町、ちょっと用事があるのでそろそろ帰ります。それと

陽乃さん。最後に…。」

「うん、なになに?」

「幸せになつてくださいね。」

「… うん、ありがと。」

そう言つて小町ちゃんは病室を出ていった。

幸せになる、か。

その権利は誰にだつてあるんだろう。

それはきっと私にも。

だつたら私は今は隣で眠つている彼と。

どこまでも幸せになつてやる。

## #4, 故に、その思いに迷いはない

—陽乃 side —

小町ちやんが帰つて1時間くらい経つたころ、一通のメールが来た。都築からだ。

『陽乃様、あと数分ほどでお母様がお見舞いに着くそうです。』

それまでの空気が消え、表情が険しくなる。

私は雪ノ下を捨てる。

今日はそのことを伝えなければならない。

ただ、相手は自分より遥かに強い人間だ。一筋縄で押し通せないことは百も承知だ。  
「いざとなりや脅せばいいんですよ。一つや二つまずいことやつてるんでしよう。雪ノ下家も。そいつを脅しの材料に使えばいい。」

比企谷くんはそう言つてた。やはり彼の曲がつた部分は1部だけ変わつてないらしい。

実際、そのまづい部分というのはある。直接聞かされた訳じやないが、仮面を被つて生き続けたことや、その上で情報を収集したことが役に立ちそうだ。  
かといって、もう仮面をつけるつもりはないが。

「あれ、小町帰りました?」

隣のベッドで寝ていた彼の目が覚めた見たいだ。

「帰つてもう1時間経つてるけど?」

「あ、まじっすか…。絶対ポイント下がつたなこりや。」

「それはまたドンマイ。」

彼はバツが悪そうに頭を搔く。

「そういえば比企谷くん。さつき都築から連絡があつたんだけど…。」

急で悪いかもしけないが話題転換を行う。

「分かりました。ちよつと席外しますね。」

「まだ何も言つてないよ!まあ、わかってるからその行動なんだろうけど。」

「本当はちよつと聞きたいですけど家族の事情に足を踏み入れるのまでは流石にあれなんで。」

うん、今回ばかりは聞かれたくないかもなあ…。

「そつか。まあ、後でちゃんと伝えるよ。」

「そうですか。じゃあ、外出でおきますね。」

比企谷くんはそのまま外に出て行つた。今、病室には私一人だけだ。

母が来るまでの間、しっかりと気持ちの整理をする。

それから間もなく、病室のドアが空いた。入ってきたのはもちろん、母さんだ。

「調子はどうかしら、陽乃。」

向こうが立つたままで会話は始まつた。

「うん、大丈夫……だと思うよ。」

「そう。」

それ以上は何も言わずに私のベッドの近くの椅子に腰掛けた。  
さて、どうやつて言おうかな……。

だが、そんなことを考えなくとも、向こうが起爆剤を送り付けてきた。

「早いところ治してちようだいね。まだやらなければいけないことが沢山あるのだから。」

そう言つて悪意のないような笑みを見せる。けど、そんなもの全然いらぬ。

今欲しいのは……『自由』だ。

「……ねえ母さん、私はもう、雪ノ下をやめるよ。」

「なんですって……？」

浮かべていた笑みは一瞬で消え、こめかみ近くに血管が浮かぶのが見えた。

「……どういうことかしら陽乃。」

言葉に怒氣が混ざる。

「そのまんまだよ。私は雪ノ下家と縁を切つて一人で生きていく。そう決めたの。」

「ふざけた発言はやめなさい……！」

「ふざけてなんかない!!」

力いっぱい叫んだ。母の怒氣よりも更に強く、自分の気持ちをぶつけた。

「子供は親の奴隸なんかじやない！ここまで育ててもらつたのは感謝してる。けどそれだけ。親の背中を見て学んだものなんて何一つないんだよ。縛られた生き方。決められた道。そんな人生は捨てるの。今日、ここで！」

「そんなこと……させないわ。」

『雪ノ下建設は1部分の物件において違法建築を行つた。』

「!?」

『国會議員雪ノ下は自分の手を汚さず賄賂を行つてゐる。』

「あなた何故それを……!?」

「他にもあるよ。この家が抱えてる問題。さて、もし無理を通してこの家に残そつて言うなら、これらの問題は報道陣に一言一句伝えるよ。《雪ノ下》陽乃としてね。」  
「……。」

もうすぐ夢が叶う。もうあと一押しだ。

「だから言つたように私は雪ノ下をやめて、一人で生きる。お願ひだから、その邪魔だけはしないで。」

母は諦めついたような顔をして言つた。

「もう好きにしなさい。今日をもつて縁を切れます。」

母はそう口にして、止まることなくドアへ向かつた。やはりその背中には何も見えず、何も感じなかつた。

「さようなら。母さん。」

気づかれないように小声でつぶやく。これが別れの手向けだと言わんばかりに。

返事は返つてくることなく、ドアはバタンと音を立て、再び病室内は私一人になつた。

やつと…。

やつと終わつた…！

再び目に涙が浮かぶ。ただ、これは今まで感じたこともなかつた嬉し涙だつた。つと、そうだ。あと伝えなければいけない人が2人ほどいたね。

感傷に浸るのを一旦やめて携帯を取り出す。

今は仕事中かもしれないが、きっと電話はとるだろう。

「♪♪」

「もしもし陽乃か？母さんから聞いたぞ、さつきの話。詳しく述べてくれ。」

「あ、もう電話いつたんだ。じゃあ1から話する必要なさそうだね。」

「ただ、とりあえずどういう経緯、どういう心情で動いたかはちゃんと自分の口から伝えた。」

父さんは何も言わずにただ聞き続けてくれた。

「なるほど…。もうそれなら仕方あるまい。ただ、陽乃。大学の資金、一人暮らしの金はどうするんだ。」

「あー…。」

「そういえばそうだ。少なくとも大学はまだ金がかかる。バイトを始めたところで自分一人じゃ無理だろう。」

「…大丈夫だ。いつかこうなるかもしれないと思つてその分の金を貯めてたから、お前の口座に振り込んでおくよ。大学卒業までは持つだろう。」

「そこまでしてるとは思つてなく、私は驚いた。

「なんで、そう思つてたの？」

「まあ、母さんあれだからさ。いつかはこうなるかもしれないってずつと思つてたんだ。とはいえる一人分。このことを最初に決断した方にだけ前々から渡そうつて決めてたんだよ。」

父さんは自分の気持ちを理解してくれていた。

その上で動かしてくれたら、こんな結果にはならなかつたかもしけなかつたけど。

「そつか。ありがとね父さん。助け舟を出してくれて。」

「礼はいらんよ。自分の娘だからな。ただ……。」

「ただ？」

「もしお前がいいなら、これからも私個人でいいから会つてくれないか？」

「うん、いいよ。」

「そうか……。話すことは以上だな。これからもがんばれよ、陽乃。」

「……うん！」

そうして電話は切れた。

少し大きいため息をついて、一旦落ち着く。

このことを伝えるべき相手はあと一人。ずっと好きだつた雪乃ちやんだけだ。

渋々 yes を出すしか無かつた母と、自分の巣立ちを受け入れてくれた父。なら、

『妹』は、どう答えるだろうか。

そう思いながらかけ慣れた番号をひとつひとつ押していく。

「♪♪」

「ひやつはろー雪乃ちやん！」

「元気そうね姉さん。今更なんのようかしら。」

「あれ？母さんに聞いてないかな？じゃあ改めて伝えるね。」

「…？」

「私は今日で雪ノ下をやめるよ。雪乃ちゃん。」

「… 言つてる意味がわからないわ。」

少し怒氣がある。けどそんなものはもう何も怖くなかった。

「私はね、変わるので、雪乃ちゃん。これまで生きた道を全部否定して。雪ノ下陽乃を壊して。」

「そんなこと… 出来るわけ」

「できるよ。許可は貰った。」

「そんな…。」

電話越しに雪乃ちゃんが呆然としてるのが伝わる。ただ、今は攻めの言葉をやめな  
い。

「比企谷くんは変わった。そして私も変わろうとしてる。あなたはどう？雪乃ちゃん。  
ずっと逃げてばつかで、何も変わらなかつた。そしてこれからもきつとそう。だからも  
う一度聞くね。雪乃ちゃんはどうするの？」

「私は…。」

答えが直ぐに出ないということは、きっと今まで通りだろう。もうそこに妥協はいらない。

「結局そなうなんだね。もういいよ。私からはもう何も言うことはない。これが最後の電話になるね。……じゃあ、これからも頑張つてね。『雪ノ下』雪乃ちゃん♪」

そう言つて電話は終わつた。

最後の声は自分でもゾクツとするほど低い声だつた。

けれどもう、これで赤の他人だ。

これからはなんの束縛もない未来が待つてゐる。

これまでよりはずつと厳しい道だとと思うけど、期待感だけで胸がいっぱいになつてゐる。

そして私はベッドから飛ぶように出て軽やかに進み出した。

自分を変えてくれた彼が待つ場所へ。

## #5, そして比企谷は仮面の少女と

一八幡 side 一

春の暖かい風が吹く。

季節は3月。まだ桜は花開くことなく、じっくりとその時を待つてゐる。では、人間にとつての3月は。別れの季節だろうか、出会いの季節だろうか。

答えは、その両方である。

俺は一人、屋上で遠くを見渡していた。

そこから見える景色は変わらない。よく見なれたいつもの町だ。

しかしそんな町でさえ、いつかは変わるのだろう。

昔見たアニメで誰かが言つていた。

「楽しいこと、うれしいこと、それら全部変わらずにはいられません。それでもこの場所が好きでいられますか?」

確かこんな内容だつた気がする。

俺は変わることが嫌だつた。怖かつたからだ。

変わることで、それまでの自分が壊れるのではと思つていた。

でも、それは違つた。

だからこうして、今は素直なままで俺は生きている。

そしてそれは決して俺だけではない。

それに……ほら。

これ以上ない清々しい顔で、雪ノ下さんは現れた。

「終わつたんですか？ 雪ノ下さん。」

「うん、終わつたよ。」

その『終わつたよ』という言葉には一つだけじやない思いが込められていた。

「これで、やつと自由なんですね。」

「そ、自由なの。」

雪ノ下さんは両手を横に広げる。まるで大空を羽ばたく鳥みたいに。

「そういえば、自由なのはいいんですが、大学とかはどうするんですか？」

「あー、うん。そこについても大丈夫。お父さんが多少なり援助してくれるから。」

「そうですか。」

きっと親父さんは分かつてたのだろう。あのやり方ではいづれこうなるのだろうと。

「… やつと、終わつたんだね。全部。」

雪ノ下さんは今までを懐かしむような声で言つた。  
ああそうだ。本当にいろんなことがあった。

1人だつた生活に新しい居場所が出来て、

そこで過ごす時間はぬるま湯のようだけど楽しくて、  
しかし結局すれ違いでまた1人になつて傷ついて、  
自分を助けてくれた人が現れて、

その人を好きになつて、

そしてその人が今度は思い悩んで、

そして今、それが終わつた。

けど、この終わりは全ての終わりじやない。

これからまた、新しい物語が始まる。

だから、

「いや、まだ終わつてないですよ。」

「え？」

「まだ、幸せになるという課題が残つてるじやないですか。」

「ふふっ、そうだね。」

雪ノ下さんはふつと微笑む。

「あつ、そういうえば比企谷くん。」

雪ノ下さんは何かを思い出したように口にする。

「あの時の返事、ずっと待たせたまんまだつたね。」

「そうですね、そういうえば。」

そうだった。俺はまだ告白の返事をもらえていなかつた。  
万一千でNOなんてくらつたら人間不信待つたナシだ。  
緊張して喉をぐくりと鳴らす。

「なに緊張してんの。大丈夫、今更NOなんて言わないよ。」「それじやあ……。」

「うん…… 比企谷八幡くん。長い間待たせてごめんなさい。  
私はあなたが好きです。こちらこそ、よろしくお願ひします。」「ふう……。」「かつたあああ……！」

一回深い息をついた。身体が緊張から開放される。

「あ、でもそうだ。」

「なんです急に。」

こんな時逆説を使われるのが一番怖い。

「付き合うなら、いくつか約束して欲しいことがあるの。」

「いいですよ。」

「そうだね。。。じゃあ、これからはちゃんと名前で読んでもらおうか♪」

結構きついやつだった。

これ恥ずかしいのなんでだろう。

「初っ端からですか雪ノ下S」

「んー?」

「は、陽乃さん。。。」

「うーん、まあいつか。」

陽乃さんは不承不承ながら了承してくれた。

「それともうひとつのお願いだね、八幡。」

「はあ。。。」

さすが陽キヤの塊。そこら辺の対応力は高かつた。

「自分を犠牲にすることは禁止。絶対にだよ?」

それは過去の自分の否定だった。

今なら即答でうんと言えるかもしれないが、完全に自信はない。

「大丈夫。私が言いたいのは、1人で全部抱え込まないでつてこと。君の悩み、私の悩みについて一緒に悩んで一緒に苦しみたい。いいよね?」

「…約束します。」

そう言うと陽乃さんはこつちを向き直す。

「そして、これが最後の約束、いや、私からの最後の依頼かな?」

その瞳は真っ直ぐでとても美しい。

「依頼ですね。聞きますよ。」

「では…。比企谷八幡くん、雪ノ下陽乃からの最後の依頼です。私を…。」

一瞬の間を挟んで。

「私を、幸せにしてください。」

これから何が起きててもきつともう大丈夫だ。

1人じやない。なら、どんな苦難だって乗り越えれるはずだ。

だから比企谷八幡は力強く、仮面の少女からの依頼を承る。

「勿論です、陽乃さん。一緒に幸せになりましょう。」

—比企谷八幡は仮面の少女と  
『main story』

final

## another story

## #1” そして由比ヶ浜結衣は離別を告げる

## —由比ヶ浜 side—

「俺は、今日をもつて奉仕部をやめる。今日はそれを伝えに来ただけだ。」

久しぶりに部室に来たヒツキーは、唐突に離別の言葉を伝えた。

理由はわかってる。きっと、あの日以降のことが原因だ。

しかし、ヒツキーは誰のせいでもない、とあらかじめこちらに責任を持たせないよう  
にした。

「俺は今回の問題を経て、自分に接してくれた人にとって、初めて変わりたいと心の底から  
思つた。素直な見方をもつた、『本物』の比企谷八幡になろうと思つた。けど、それはこ  
の場所じや見つからない。そう思つた。だから俺は奉仕部をやめる事にした。」

変わりたい、ヒツキーはそう言つた。

私はどうだろう。同じ状況になつて助けてくれる人がいただろうか。

表面上はいるかもしれない。けど、心の底から助けてくれる人が、私にはいるのだろ  
うか。

ゆきのん？： ゆきのんなら、きっと助けてくれるかもしれない。けど、今のゆきのんなら、ちょっとわからない。

私は自分が大嫌いだ。いつも取り繕つてばかりで、本当に見なきやいけないもの、忘れてたんだ。

それなのにヒツキーは上手く接してくれて……なんだろう私って本当に馬鹿みたい。もう、そこから先に私のセリフはなかつた。少なくとも、今この奉仕部で私が言えることは何も無いと思う。

そう思つて下を向く。聞きたくない結果だけが耳に入つてくる。

ふと、涙が零れてきた。でも、何の涙だろうか。

ヒツキーがいなくなるから？自分が傷つけたから？この関係が壊れるから？： ヒツキーが好きだつたから？

流れた涙の意味さえわからないまま時間はすぎてく。

「……で過ごした時間は悪くなかった。今までありがとな。」

そう言つてヒツキーは奉仕部を出ていった。

……  
だよ。

嫌だよ!!

気がつけば私は走り出していた。周りの静止の声なんかには耳も傾けず、ただ走り続けた。今行かないと、もう二度と話せない気がしたから。そんなのは、嫌だ。

ああそつか。やつぱり私、ヒツキーが好きだつたんだろうな・・・。

もうどうにもならない感情を押さえつけて走る。ヒツキーはそこにいた。

「ヒツキー!!」

「由比ヶ浜か。どうした?」

ヒツキーはいつものように答えてくれた。他人行儀な姿勢を取らてたら、私はど

うなつてただろうか？

一  
まではもうどうにもならないと思ふけど謝らせて  
ほんとうに今までこめ

۱۰۷

もう一度泣きだしそうな感情を抑えて深々と頭を下げる。

「いや、さつきも言つたけど誰のせいでもないんだよ。俺でも、由比ヶ浜でも、……」正直困る。「下でもない。だから謝られたって……」

ヒツキーはバツの悪そうに答えた。

「…そつか。」

頭をあげる。…また空回つちやつたな。

「んで、急に走ってきて何の用だ？忘れもんなんて無いはずだぞ。」

「…あたしつて、何だろうね。」

「…はあ？」

「そうだよ。いつもいつも周りにとつて都合のいい人間として生きてきて、そのせいで大事なもの失つちやうんだ。あはは、無様だよね。」

だからヒツキーのことも分からずに、こういう結末を迎えちやつて。

もつと分かつてれば、変われたかもしれないのに。…ねえ、私つて、一体何なの…

!?

混乱して心にストッパーなんてものはなかつた。

これまで溜め込んだものが涙と一緒に流れる。ああ、ほんとダメだ私つて。

「… そうだな、俺も分からん。というか、自分のことは誰だつて自分が一番分かつちやいない。ただ、そうちからこそどうなりたいか、つてのは自分で決めるんじやないのか？」

無理だよ… 今の私にそんなこと…。

「…そつか。…ねえヒツキー。これが最後になるならせめて聞いて欲しいことがあるの…。」

「…からも、せめて離別の為に言いたいことがある。」

「…聞いてやるよ。そうやって今までお前の馬鹿な話を聞かされてきたからな。」

「うん、ありがとう。」

やつぱりヒツキーって優しいな。だから私は…。」

「比企谷八幡君、ずっと…ずっとあなたが好きでした。」

## #2" 由比ヶ浜結衣の居場所は

—由比ヶ浜 side—

「失礼かもしないが… やっぱり。 そうだつたんだな。」

ヒツキーは申し訳なさそうに下を向いた。 あはは、 やっぱりバレちゃつてたよね。 あんなに… 近くにいたんだから…。

そしてヒツキーは少し躊躇つて、 顔を上げた。

「… すまん。 お前の気持ちには答えられない。」

「うん、 分かつてた。 そして分かつてるよ。… 今のヒツキーの隣に誰がいるべきか。」

それは私じゃないから。

そう言おうとしたが、 ずっと抱えていた思いが崩壊したからか、 再び情緒不安定になる。

「… ごめん、 もう行つてヒツキー。 もうこれ以上… ヒツキーの前で迷惑かけたくないから…。」

「… そうか。 じゃあな、 由比ヶ浜。」

ヒツキーは私の表情を見て悟つて、 それ以上何も言わず玄関へ向かつていった。

もう、いいかな…。

私は近くにある空き教室へ入ると、その場に座り込んだ。

「うつ、ぐず… うわあああああ！」

私は大声を上げて泣きだした。人の目なんて興味もなかつた。ただ今は、胸の中にある全ての感情を吐き出したかった。

⋮

何分くらい泣いただろうか。

目は真っ赤に腫れ、ものすごい頭痛に見舞われる。

あたしはフラフラとしながら立ち上がり、帰るための荷物を取るために奉仕部の部室へと戻りに行つた。

あの後部室に行つたが、鍵が空いたままもう誰もいなくなつていた。  
この前までのこの教室なら、また明日と言つて帰れた。  
でも今はどうだろう？ここが私の居場所でいいのかな？

⋮ もう今は、どうでもいいか。

考えることをやめた私は、「じゃあね」とだけ呟いて奉仕部の部室から出ていった。

あの日から数日がたつた。クラスは少しだけギクシャクしたまま、それが当たり前のようになっていた。

私だつてずっと引き摺つてなんかられない。元気出さなきや。  
んで、えーっと、今はなんの時間だつけ？

「結衣、結衣！聞ーてんの？」

「え、ああ！ごめん由美子…」

あの一件以降、いつも集まっていたグループは散り散りになつた。  
でも、由美子と姫菜は変わらず私と接してくれていた。

「結衣、明日一緒に遊びに行くし。」

「ああ、うん！いいよいよ！」

顔に笑顔をうかべる。きっとひどく薄っぺらく、冷たい笑顔を。

「…じゃあ、駅前に9時で。」

一瞬だけ由美子の表情が歪んだ気がしたが、気のせいだと思う。

こうしていつものように、遊びに行くことになつた。

土曜日、私は集合場所へと向かつた。

集合場所には、見るからに暇を持て余しているような由美子がいた。  
あれ？ いつもは最後なんだけどな……？

まあ、そんなこともあるだろうと思つて由美子に声をかける。

「由美子ー！ やつはろー！」

「… ん、ああ、結衣。」

いつもの素つ気ない返事とは違う、違和感を感じた。

「どうしたの由美子。元気ない？」

「いや、そんなことないし。つたく姫菜遅いし……。」

「はろはろー！ ゴメン、最後だね。」

そんな時タイミングよく姫菜がやつて來た。

「姫菜やつはろー！」

「姫菜遅いし……。ま、いつか。とりあえずどこ行く？」

「あれ？ どこ行くつて……決めてなかつたの？」

「全部は。カラオケ行くことだけ考えてたし。」

「じゃあ服とか見に行つてみる?」  
「姫菜それ!」

こうして私達は動き出した。由美子の異変に気付かないふりをして。  
：

色々回つてみたものの特に買うものはなく、当初の予定通りカラオケに入つた。

ここにもみんなで来たつけ。

そんなことを思つてまた、少し悲しくなつた。

部屋に入る。姫菜はトイレに寄るため、少し遅れてくるそうだ。

「さてと、もう何曲か入れちゃおうかな。」

私が機会に触ろうとしたその時だつた。

「結衣、ストップ。」

「? どうしたの? 由美子。」

私は手を止めて由美子の方を振り向く。同じタイミングで姫菜も入つてきた。そしてそのまま由美子の隣へ座る。

⋮

場に沈黙が流れる。

「な、何何？どうしたの二人とも？」

「結衣、あんたはさ、あーしたちのことどう思つてんの？」

「どうつて… 友達でしょ？どしたの急にさ。」

「… それだけ？」

姫菜も、由美子も真剣な目をしていた。生半端な言葉が通らないくらいに。  
「それだけつて… 他にどういえばいいの？」

すると由美子が力強くテーブルをバンと叩いた。

「ああもうじれつたい！ 結衣！ 何であんたはいつつもそうなの！ 建前で場を作つて、表情を偽つて辛いこと押し込めて！… もう一度聞く。結衣にとつてあーしたちつて何なの！」

由美子は全力で、叫ぶように言う。その目にはもう涙が溜まっていた。

「えつと… 分からないよ…。なんて言えばいいか。」

私は一方後ろに引いた。その時、前に引っ張られるのを感じた。

「逃げちゃダメ！… 結衣、逃げちゃダメだから。」

姫菜が私の腕を掴んでいた。その腕には今まで感じたこともないような力を感じた。

「結衣、あんたの隠してること、抱えてる辛いこと、全部あーしたちに話してよ…。あーし達は少なくともあんたのこと大事な友達だつて思つている。…もし結衣もそなうら、ちゃんとあーしたちに聞かせてよ…。」

由美子が言う。

もうその声には、さつきまでの勢いはなかつた。

「…そつか。また私は、大事なものを失つちやう所だつたんだ。

「…めんね。ごめんね。由美子、姫菜。…きつと私、ずつと2人といた時上辺の付き合いしかしてなかつた。こんなに大切にしてもらつてたのに気づけなかつた…。ううん、目を逸らしていたんだと思う。」

口を開いて出てきたのは懺悔と涙だつた。

「…今からで間に合うなら、聞いて欲しいことがあるの。…聞いてくれる…？」

「うん、いいよ。」

姫菜が優しく答えてくれた。由美子も言葉はなかつたが頷いている。

「えつとね…」

それから全て話した。

修学旅行のこと。少なからずとも私のせいで大事にしてた関係が壊れたこと。居場所なんてないと感じたこと。

2人はただ黙つて聞いてくれた。そして、私が話し終わると今度は2人が胸中を語つてくれた。

話し終わる頃には目に涙のない人はなかつた。

ああ・・・きっと、ここが私の居場所なんだ。

そう思うと、これまで抱えていたモヤモヤが全部吹き飛んだ気がした。

私は、2人にそばにいたい。ずっとこの3人でいたい。だから・・・

「由美子、姫菜。これからも、私の友達でいてくれる?」

傲慢な願いかもしれない。でもこれだけは聞き入れて欲しい。

「うん、いいよ。これからもよろしくね、結衣。」

「当たり前だし・・・！絶対に、もうこんなことにさせないから。」

迷うことなく、2人はYESと言つてくれた。

「ありがとう。2人とも。」

そして私は顔いっぱいに笑顔を作つた。

(了)

それは生きてて今までで、一番気持ちのいい、嘘偽りのない笑顔だった。

## after story

## #LAST そして物語はどこまでも続く

—八幡 side —

朝6時。今日も今日とて何気ない一日が始まる。

ベッドから起き上がる。俺の【隣】はすでに空いていた。

リビングの方へ向かうと、キッチンの方から少しずつフライパンの音と元気の良さそうな女性の鼻歌が聞こえてくる。

「あ、おはよう。八幡。」

その女性——雪ノ下陽乃改め、比企谷陽乃是リビングに入ってきた俺に気づくと挨拶をした。

「おはよう陽乃。」

病院の屋上で告白の返事を貰ったあの日からもう10年近くたつた。

最初の方はやはり少し色々あつたが、付き合いが崩れることは全然なく、俺が大学を卒業して2年くらいたつた頃、俺達は結婚した。

そうして今日もこうやって、2人で何気ない日々を送ってるのである。

：まあ、もうじきその2人も、3人になるのだが。

そう。陽乃のお腹には子供がいる。確か今5～6ヶ月だつたか。安定期に入つていいから今はこうしていられるけど、もう数ヶ月したら出産期になる。

ほとんどの確率では大丈夫だとは言われるが……。正直、やつぱり怖い。

なんて、俺が弱気になつてもしようがない。それに、守るべき人が増える分、俺も少しは強くならないといけないはずだ。

「今日は仕事終わるの早いんだっけ？」

机を挟んで、朝食を取りながら今日の話。予想は出来ると思うが、陽乃は会社の方を退社しているため、今は日中家で1人なのである。

ついでに言うと陽乃と就いている会社は一緒だつた。

時々悪戯めいた顔で「寂しい」なんて言つて抱きついてくるけど、きっとこれは本心だと思います。

何故なら、あれからもう随分と作られた陽乃の表情、言動を見ていない。証拠なんて、これだけで十分だ。

もちろん、なるべく早く帰るようにしているし、一緒にいる時間をできるだけ多く

作つてゐるつもりだ。

幸い、すぐくプラツクな会社な訳でもないので、そちら辺はすんなり通る。

「確か3時くらいには終わるから、もし何かあつても5時までには帰る。何も無かつたら直行で。」

「OK。じゃあ今日も美味しいご飯作つて待つてるから。」

妊婦なのに俺が帰る時間を問わず、その時間でご飯を作つてくれる。

それはもう、十分にありがたいことだ。

「楽しみにしてるよ。…と、時間もあれだし早く食べてしまうか。」

「味わつてよ?」

「もちろん。」

そうしていつも通りの、明るい朝が過ぎていった。

PM3時

予定通り、今日分の仕事が終わつた。

因みに会社の方だが、一流、という訳でもないが、そこの多く部署があり、人数も

多い。因みにこの会社に戸塚も就いていて、入社式の時はさすがに驚いた。まあ、部署は違うが。

「お先に失礼します。」

よし、勤務終了。荷物を持ち、デスクを離れる。

「おう、じゃあな！」

少し離れたところから部長の声。

「奥さんによろしくな。」

「あんたそれ毎日言つてるだろ‥‥」

隣の同僚までもが少し茶化したように言う。

高校時代の俺には考えられなかつた光景だ。

上司と部下の関係にも慣れ、同僚と共に仕事をして、信頼し合つて作業を進める。

他人と群れることを嫌つて、働くという当たり前の現実から目を逸らしていたあの頃の俺は、今の俺を見てなんて言うんだろうな。

「へつ、社畜が。」なんて吐きそつだが、今になつてみるとやっぱり考えは変わるもんだ。

それこそ、陽乃がいてくれたから俺は変われたが。

それから会社を出て数分歩いた頃のこと。

「つと、まだ今から帰る連絡をしてなかつたな。」

そう独り言を呟いてバッグからスマホを取り出す。

しかし、俺の手は一旦そこで止まつた。

「ん？ありやあ……。」

遠くに見覚えのある人影を見たのだ。

覚えずしてそつちの方へ歩み寄っていく。

「…？」

その人はこちらに気づいたようで振り向く。

その視線があつた時、おたがいの動きが止まつた。

「比企谷…君？」

その女性はスラツとしたスタイルに綺麗な黒髪をしており、どこか冷めたタイプの雰

囲気。

俺の知人であれば、該当者は1人だけだ。

「やっぱり雪ノ下だつたか。」

そう、その女性は雪ノ下だつた。高校卒業後長い年月会つてなかつたが、人目でそれとわかるほど変わつてなかつた。

…少しあつてこうな雰囲氣もあつたが、

「その… 久しぶりね。」

「ああ、もう10年近く会ってなかつたしな。」

二三

色々あつたぶん、こういう時の会話に困る。

しかし、ここですつと立ち往生してるわけにもいかないので、どこか店によることにした。

いや、さすがに大人になつてそうやすやすと  
サイゼに行つてはいけない氣もする。

お前今日このあと少し空いてるか?」

え、ええ。今日は休みでこれ以上特に何もないけれど……。」

雪ノ下は俺が意外と普通に喋つてゐるのに驚いていた。

「まあ、話とか色々あるなら、一旦そこのかフェでも行かないか?」

「ええ。そうしましようか。」

とりあえず俺は陽乃に『雪ノ下と話したいことがあるから遅れる』とだけメッセージを打ち、店へと向かつた。

店内へ入り、適当に座つた後コーヒーを二人分頼む。頼んだのは普通のブラツク。M AXコーヒーは陽乃に飲みすぎを注意されてしまつたので最近は減量している。

「その…： 比企谷君、姉さんは元気してるのでしら。」

会話の始まりはそこからだつた。しかし、雪ノ下自身が姉の話を持ち出したのには驚いていた。

「ああ。今は家でのんびりしてるんじゃないのか？出産までそう長くもないし、そうしてもらつてないとちょっと心配だけどな。」

「…。」

雪ノ下はどうやら姉の妊娠のことを知らなかつたらしく数秒口を開けて固まつていた。

そして、動搖を満足に隠せないまま口を開く。

「姉さん、妊娠してたの…？」

「ああ、もう5～6ヶ月だな。」

「そう…。おめでとうと言つた方がいいのかしら。」

自分の姉のことについて少し微笑む雪ノ下。

俺はそれにかなりの違和感を感じた。

そしてひとつ目の答えがてた。

今の雪ノ下は、俺の知つている雪ノ下では無くなつている。

当然だ。一言一言に棘がない。代わりに、どこかで感じたことのある黒い部分、威厳が見え隠れしている。

多分、今の雪ノ下はきっと…。

「そういうえば、お前は最近どうしてるんだ？」

姉妹とはいえ、片方が縁を切つてゐるため、そこの情報について俺は全然知らない。

「そうね、姉さんがやつてたこと、その役割がちょうど私に來ていてる感じかしら。あちこ

ちに回つて挨拶をしてはまた別の場所で、みたいに。」

やつぱりか。

あの母親からは逃げにくい。というかほぼ無理だ。

陽乃はそれにずっと耐えてきて、やつとの思いで道を掴んだ訳だ。

流石に一人いなくなつた以上、もつと支配を強めるのは間違いないだろう。

「そうか…。」

「ねえ比企谷君。」

呼びかけられて顔を見る。その表情は諦め切つた哀しそうなものだった。

「姉さんは、今幸せ……よね。私は、どうすれば姉さんみたいに幸せになれたのかしら。ずっと追いかけて、後ろから見ていてばっかりでも、結局……届くことなんて……できなくて……。」

少しずつ落ちてく涙のせいか、だんだんと声が小さくなってきた。  
「姉さんは変わった。変われた。私も……もう無理かもしれないけど……変われるのなら……変わりたい……！」

時間が経つて初めて気づくことがある。

そして残酷なことに、時間が経つてしまえば、もう無理な事もある。

でも、俺は知っている。

どれだけ時間がかかるうと、結局変われるかどうかなんて自分次第だ。諦めなければなんととなるなんて台詞はクさいが、実際似たようなもんだ。

「できるんじやねえの。なんたつてお前は強いからな。結局、環境なんて自分次第なんだよ……。そうだな、一言で言うならば。『過去の、現在の自分を否定しろ』ってことだな。」

「過去、現在の自分の否定』……。」

「ああ、そうだ。結局変わるつてそういうことなんじやねえのか？」

「そう……。そうね。」

少し開き直った雪ノ下は俺にあるお願ひをした。

「比企谷君、その… 少し手伝つて欲しいことがあるのだけど。」

PM5時

約束の時間までには帰つてこれたな…。

玄関のドアを開けると、エプロン姿の陽乃が立つていた。

「おかえり。ギリギリセーフ、かな?まあいいや。雪乃ちゃんどうだつた?」

「ああ、色々とあるらしいがとりあえず元気そうだ。」

「うーん… 何となく予想出来るんだけどね…。」

やはり姉妹と言うだけあり、色々の部分の理解が早かつた。

「そうだ、これ見てほしいんだが。」

そう言つて俺は自分のスマホの写真フォルダーを開き陽乃に渡す。

「ん?なになに。動画?」

『久しぶり、姉さん。その… 元氣にしてるかしら。… あの日家を出でいつた事、すごく驚いて… すごく羨ましかつた。そして分かつたの。やっぱり私は姉さんには叶わないって。届かないって。でも、私も変わりたいと思つてる。だから一言だけ… 姉

さんに言えなかつたことを言わせて欲しいの。本当は、こんな動画越しに言うべきものでは無いのかかもしれないのだけれど。姉さん、今までありがとう、それに、結婚、おめでとう。』

雪ノ下は、姉が絶縁状態にあつたため、家の方から俺たちの結婚式に来ることを禁止されていた。その後も会うことがなく、改めて言う機会がなかつたため、これが初めての祝いの言葉となる。陽乃は、幸せそうな雰囲気の結婚式の中、きつと雪ノ下のことを気にかけていたはずだ。

今回のこの動画はきつと、雪ノ下が変わるために起こした小さな反抗みたいなものだと思う。

その動画が終わつた時に俺はバッグからもう1つ物を出した。

「あとこれ。雪ノ下からの贈り物だと。」

そう言つて俺は向日葵のブローチを手渡した。

見終わつた陽乃是少し泣きながら「やっぱり雪乃ちゃんは不器用だなあ・・・」と呟いた。

そして涙をふいてもう一言、優しい声で動画越しに雪ノ下へエールを送つた。

「ありがとう、雪乃ちゃん。大丈夫、あなたもきっと変われる。」

変わるとか、変わらないとか。どつちがいいかなんて人それぞれだ。  
でも結局、自分次第で道は変える。

そうして自分達で変えてきた道を俺は歩いていくだろう。  
そこには嘘の、偽りも仮面もない。

ただ真っ直ぐな気持ちだけがあるはずだ。

だから、俺たちの物語はどこまでも続く。

—そして比企谷八幡は仮面の少女と

f i n |